ゲルマンの騎士達と終わる世界

炒り豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲルマンの騎士達と終わる世界

【Ｎコード】
Ｎ５０３０Ｗ

【作者名】
炒り豆

【あらすじ】
ドイツ第３帝国装甲中隊黒騎士中隊のメンバーは１９４４年の東部戦線で絶望的な戦いをしていた、そんな中彼らは妙な霧に包まれる。
気が付くと、学園黙示録の世界に！？
ドイツの騎士は終わる世界の中で彼らは何を見るのか。
ビットマンやｚｂｖ、パイパー大佐も出る予定です。オメガも出るかも、ハッピータイガーと狼の砲声は未定です

序章　転移

１９４４年　冬

「クルツ！３時方向にＴ－３４、標準急げ」

「了解！」

中隊長バウアー中尉の怒声が上がる、それに答え砲手のクルツはＴ－３４にパンターの主砲を命中させる。

「補給段列がやられたら、えらい事になる、イワンを近づけるな！」

黒騎士中隊は戦線を突破し補給段列に襲い掛かろうとしていたソ連軍と戦闘していた。

こちらの戦車は2両、対するソ連軍は２０両近くの車両が襲い掛かってくる、だがこの程度の数の差は慣れた物だ。

「中尉酷いもんだ、敵であふれてやがる」

「イワンの物量は底なしなんだろう、シュルツそっちに3両行ったぞ！」

2号車の車長シュルツ准尉の愚痴を返しつつ、次々とＴ－３４を撃破していく。

鋼鉄の猛獣たちの狂宴が続き、Ｔ－３４の数が5両を切った時ソレは起こった。

「急に霧が出てきたな、2号車視界に注意せよ、クルツ外すなよ！」

『了解、中尉殿！！』

２人から返事が返るとバウアーも笑みを浮かべ、そのまま残りのＴ－３４を屠った。

補給隊列と合流しようとすると、より霧が濃くなる。

「むぅ、さらに霧が濃くなって来た、方向を見失う前に補給隊列と一緒に中隊本部に帰るぞ」

２両のパンターは補給隊列と合流して中隊本部に帰還しようとしたが霧はさらに濃くなり、戦車の車内まで侵入してきた。

「中尉！目の前がｇ・・・」

「クルツどうした！？２号車応答しろそっちは・・・くそ、イワンの毒ガスか？・・・」

そう怒鳴りつつ自身の意識も遠のいていくのをバウアーは感じた。

濃霧が晴れたとき、２両のパンターは消えていた。捜索部隊はこう報告した黒騎士中隊の２両は行方不明だと。

そして黒騎士は終わる世界に流れ着く

序章　転移（後書き）

前回短編投降したものを調整して長編に挑戦してみます、感想やアドバイス、希望がありましたらどうぞお願いします。

源文節は足りないし短い・・・

潜入（前書き）

第1話です。
殆どバウアーたち視点ですが、よろしくお願いします

潜入

1話

〜〜潜入〜〜

バウアーは目を覚ました。コマンダーキューポラから頭を出しあたりを見回し自分たちの状況を確認する。

しかし彼らが先ほどまで居た、ロシアの森林地帯では無かった。

「おいおい、俺たちはヴァルハラじゃ無く、ニューヨークにでも着たのか、おいクルツ起きろ！」

「う・・・う、中尉！？ご無事で！？」

「それよりクルツ外を見てみろ、コンクリートジャングルのど真ん中に居るぞ、他の連中を外に出すぞ、手伝え」

バウアーはクルツをたたき起こし、この現状確認をさせる、クルツは標準機を覗くと見えたのは確かにビル郡と舗装された地面である。

ここはちょうど建物の陰で人もいない。

少なくとも2人で見てると言うことは夢ではなさそうだと言うことは確認できた。

「中尉、ここ桜が咲いてますよ、ワシントンじゃないですか？」

「クルツ、このビル郡がワシントンなんかにあると思うのか？俺はニューヨークだと思う」

残りのメンバーや2号車、補給隊列の一部を車両から下ろしながら2人はそんなことを話していた。

「うう、っ・・・中尉、ここはヴァルハラですか。妙に暖かいですぜ」

中隊副官のシュルツ准尉が目を覚ましながらそんなことを口走る。

「シュルツ、ここは俺たちにも良く分からんが、周りの様子を見るとアメリカ辺りだと俺は思っている。

「アメリカですか、久しぶりに旨い飯が腹いっぱい食えそうですね！」

シュルツがへへっと笑いながらジョークを飛ばす。

「どちらにしてもここがアメリカなら降伏するなりしないと何もできませんよ？」

「あせるなクルツ。それよりここが何処なのか確認して、例えニューヨークだったとしても飯食ってから投降しても遅くあるまい」

バウアーは親指で後ろの建物を指差しながら、笑顔で言った。

「待ってください、隊長！」

「ん、目を覚ましたか？、オットー・クリューガ曹長」

彼は黒騎士中隊補給隊列の責任者オットー・クリューガー曹長であ

る（注・原作には居ません）

「ちょうど良かった曹長、ルガー拳銃のマガジンを４つほど貰いたいのだが」

「それどころでは、中尉は楽天視しすぎです！！」

「そう言われても、変わる問題でもあるまい」

クリューガーはバウワーをまくし立てるがバウアーはそれをいなしつつシュルツにアイコンタクトを送る。

シュルツは了解したと返し補給隊列の中に消える。

「そもそも、中尉は毎回毎回無謀なんですよ」

「ああ、そうだな」

「聞いてないでしょ！」

「ああ、そうだな」

「中尉～！パンター全車動きますよ！」

クリューガーのお小言を聞き流していたバウアーはクルツに命令していた車両のチェックの結果を聞き、満足そうにうなづき。

その背後でシュルツも声を上げた。

「中尉！、マガジンと、手榴弾、ＭＰ４０とＭＧ４２を借りて着ました！」

「そう言うことだ曹長、我々はあの建物を探索してくる後は頼んだぞ、行くぞ、シュルツ！クルツ！」

『了解！中尉殿！』

「待ってください話は・・・はぁ、各員いつでも動ける用意をしておけ何が起こるかわからんぞ！」

クリューガーの話半分にバウアーは部下2人を呼び建物の中に入って行った。

クリューガーはため息を付きつつ、部下に命令を下した。

そして、建物に潜入したバウアー達はと言うと。

「何ですか中尉、これ漢字で書かれてますぜ？アメリカじゃないんですかね？」

「俺もよく分からん、日本か中国だとしてもこんなビル群があるとは・・・」

「中尉！、凄いですよ食料がこんなにありますよ！！」

「見せてみろ、何だこのカップは？良く分からんが食えるのか？」
寄宿舎の看板前で唸りながらシュルツはバウアーと相談しつつ考えていたがクルツの言葉でバウアーは室内に入りカップ麺の前で食べ方を考えて居た、そんな中。
「さて、俺もここで寝かして貰うとするか、ん・・・！！」
金髪の髪を立たせ、制服のボタンを全部空けた青年は昼寝をするために寄宿舎にもぐりこみ寝ようと思い、
この距離のある寄宿舎まで訪れた。すると真っ黒の軍服らしきものを着た男たちがカップ麺の箱をあさっていたのである。
そして運が悪いことに彼らと目が合ったのである。
眼帯の男が飛び出してきて、青年を取り押さえ口を押さえる。
彼もあがこうとするが微動だにできない。そしてその眼帯の男が声を上げた
「動くなといってるだろ」
「もが、もが・・・」
大きい声では無いもののドスの聞いた声を出す、青年は口を押さえられもごもご言うのみだ、そのままその部屋に引き込んでいく。
「大声を出すなよ、首を折られたくなかったらな」

彼はブンブンと首を縦に振った、すると彼らも手を口から離す。当然拘束は解かれなかったが。

「ドイツ語は分かるか？アメリカ人」

「無理でしょう、中尉、こいつあんまり頭良さそうな顔じゃありませんぜ」

もう一人の顔の彫りが深い男がそう言うが、青年は心中でほっとけよとしか言えなかった。

「な、何言ってるんだ、ここは日本で俺は日本人だぞドイツ語なんて・・・」

「何？日本だと！？嘘を言うな君は金髪ではないか？」

「染めてるんです」

「我々は日本語は知らんし、ドイツ語を喋っているのだが、なぜ通じるんだ？」

「知りませんよ、俺だってドイツ語なんて知りませんし」

「むぅ、どういうことだ？」

バウアーとシュルツが考えている中、クルツがカップ麺を持ってきて

「通じるんだからいいじゃないですか！それより君これの食べ方を知らないかな？」

「えっ、カップ麺の食べ方？（そんなのも知らないのかよこいつら！？）お湯を入れて3分待つんですよ」

実演しますからと言って青年は、カップ麺を持って近くにあったポットに注いだ。

「これで、3分待って食べるんです。」

「ありがとう、凄いな3分待つだけで麺類が食べれるなんて、保存性も良さそうだ」

クルツは手を掴み礼を言い、カップ麺を3つ作り出す、食器棚からフォークを3つ用意する。

カップ麺を待つ間、青年は彼らに聞いた。

「貴方たち何者ですか？」

「我々ですか、私は、ドイツ国防軍、第8中隊所属のクルツ・ウェーバー伍長」

「俺はその第8中隊隊長のエルンスト・フォン・バウアー中尉だ」

「同じく自分はオットー・シュルツ、青年君は？」

「私立藤美学園高等学校の森田です」

自己紹介をしてる間に3分立ち、４人でカップ麺をすする。

「うん、旨いな、普段の食事より何倍もだ！」

「これが我が軍に配備されれば良いんですがね」

「日本人はいいもの食べてるんですね」

「いっいやぁ～そう言うわけではなくて」

フォークで食べている人数が多いなか、ひとり箸で食べてる森田と名乗る青年にバウアーが口を開いた。

「しかし日本の街のど真ん中、しかも２００X年だとは信じれらんぞ？」

（俺だって信じれねぇよ、１９４４年のドイツ軍だって冗談でも通じねぇよ・・・）

両者同じことを言ったり、思ったりしていた。

「しかし中尉、本当だとしたらどうします？しかもここ学校だって言うじゃないですか。どうやって国まで・・・」

そんな事を言っている間に食べ終わり、森田を引きつれカップ緬の箱を運んでいる時にとうとうそれは起きた。

「本当にこのルートでいいのか？森田」

「ええ、この道は途中に保健室があるけど保険の先生は抜けてるしここから抜けたほうが近いんですよ」

バウアーが森田にそう聞くと森田はそう返す、森田の口調が砕けてきているのも、バウアーが部下でもないのに無理に敬語を使う必要

はないだろ？とのことだった。

「そうか・・・信じるぞ？」

そして・・・その時

ーーーブッガガッ

『全校生徒・職員に連絡します！　校内で、暴力事件が発生中です！　生徒は、先生の指示に従って直ちに避難して下さい！　繰り返します、校内で暴力事件が発生中です！』

「ん、何だ？何が起きたんだ！？」

「暴力事件？」

「穏やかじゃあないなクルツ、俺たちで制圧してみるか？」

「准尉無茶言わないでくださいよ」

冗談を言い合って居る中放送に異変がおき

『ギャァァァァァァッ　あっ、やめてくれ、助けてくれ、たすけっひいっ、痛い痛い痛い！！助けてっ、死ぬっ、ぐわぁぁぁあ！！』

その後は放送から咀嚼音がするだけであった。

「ただ事じゃなさそうだ、クルツ、シュルツ！ホルスターから拳銃を抜いておけ！」

『了解中尉殿』

３人がホルスターから拳銃を抜いた後、そんな彼らの１０メートル向こうに人が歩いていた。

「お～い、大丈夫か～？」

森田が走りよっていくが、バウアー達は異様な気配に感づいた。全身から血を流し、白目をむき、極めつけはわき腹のえぐられた痕であった。

「森田！！近寄るな！戻って来い、そいつは死んでる！」

「え？」

森田がそれにぶつかり、衝撃でそれの口から指が２，３本転げ落ちた。森田が悲鳴を上げ逃げようとするがすでに捕まれていた。

もはやここまでかと思われたとたん、

「情け無用、撃て！」

瞬く間に脳天に穴が２つ開いていた、それが崩れ落ちる森田は腰が抜けたのかその場にへたり込む。

「大丈夫？肩かしましょうか？」

「あ、ああ」

クルツが走りより肩を貸し森田を起こす。

「しかし、今のは何だ？」

「中尉、外を見てください！何だこれは！？」

バウアー達が窓の外を覗くと、人が人を襲い、食われて死んだものが立ち上がり別の人間を襲うと言ったさながら地獄絵図が広がっていた。

「何かの悪い冗談か？クルツ俺たちはまだ夢を見ているのか？」

「夢じゃあ無いでしょう・・・

私たちはここに居るんですから」

潜入／ｄａｓ　Ｅｎｄｅ

潜入（後書き）

どうでしたでしょうか？
第1話でした、まだまだ描写が足りませんね、他の作者様が羨ましい、源文作品支援ｓｓとして投降させていただきます。

感想、アドバイス、意見お待ちしてます。

戦闘そして・・・（前書き）

原作組みと合流開始です、それぞれの口調に悩みます。

戦闘そして・・・

第2話

出会い

「しかし、何なんでしょうか？こいつら」

「分からんが、ここの生徒の成れの果てらしい」

バウアーとクルツが撃ち殺したソレを見下ろしながら相談する。

「なっ何がどうなってるんだ、うわぁぁぁ！？？」

「錯乱するな、馬鹿者！」

「へぶっ」

パニックに陥りかけていた森田をシュルツがパンチ一発で我に返らせる。

「この状況でパニックに陥ってみろ、即時昇天するぞ？」

「すんません・・・」

頬を擦りながら森田はシュルツにあやまりながら立ち上がる。

「何、新兵にはありがちなことだ、ましてや民間人ならな」

シュルツは民間人には強すぎたかな？と呟いているが、バウアーとクルツはルートの確認に出ていた。

「中尉ここを曲がって階段を下りれば保健室のようですね」

「そのようだな、動く死体もこの辺には余り居ないようだ、我々で十分排除できる」

「よしクルツ、シュルツたちを呼んで来いこの道を通るぞ」

「了解、中尉」

クルツが走りシュルツたちと合流しようとする、そんな中。

「くそっ、急に増えやがって、森田先に行って、中尉と合流しろ！！」

森田に自身の拳銃を渡し、背中を押す

「行け！俺も直ぐに追いつく」

「あっ、ああ」

隣の棟から＜奴ら＞が流れ込んできたのだ、森田は2人の向かった方向に歩き、シュルツはＭＰ４０短機関銃を掃射し＜奴ら＞を近寄らせない。

「くそっ、胴体や心臓に当てても効果が薄すい・・・狙うなら頭部か！」

シュルツの奮戦は続くなか、森田は走っていた。先ほどの2人に合流するために。

出会って期間も短く出会いも散々だったが、この状況では誰よりも信用できた。

その時、曲がり角から＜奴ら＞が飛び出してきた。

「くっ、くそぉ・・・俺だってやればできるんだよぉ！！」

森田の放った弾丸は3発は外れたが、一発頭部にヒットしてそのまま＜奴ら＞は崩れ落ちる。

「ふぅ・・・、ん？うわぁ！？」

しかし背後から現れたもう一体には反応が遅れ追い詰められ、あわやここまでと言った時

2発の銃声が校舎に響きわたる。

「間に合いましたね！大丈夫ですか？」

クルツが間に合い、2発の銃弾を＜奴ら＞の脳天に叩き込み、沈黙させそのまま駆け寄り尋ねる

「シュルツ准尉は？」

「シュルツさんなら向こうで・・・」

向こうで爆発音が床を揺らし、シュルツが走って来て2人の居る角に飛びこんだ。

「准尉！」

「シュルツさん」

「連中のど真ん中に手榴弾ぶち込んでやった、ざまあみろだ！」

シュルツはそのままタバコに火をつけ。

「中尉は直ぐそこに居るんだろ？、行くぞ！！」

3人はそのまま、合流地点の階段目指して走った、この爆発のおかげで爆心地に＜奴ら＞が集まり他の場所から減ったのは余談である。

「あいつら何をやっとるんだ、もう直ぐ合流時間だぞ？」

バウアーが時計と睨めっこしている中、3人が廊下から走ってきた。

「遅いぞ何処で道草食っていた？」

「すみません、中尉！連中がイワンみたいに沸いてきやがって」

「どうやら、我々は数で押してくる敵とは因縁があるみたいだな」

「同感です中尉、どちらもお代わりは嫌と言うほど用意してあるようですね」

3人がそう雑談をしながら、状況を確認する。

「森田！この階段を下りて直ぐが保健室前なんだな？」

「はっはい！！」

「よし、行くぞ、付いて来い！」

バウアーが先導して階段を下りていく。途中数体の＜奴ら＞が襲いかかるが、それを確実に討ち取っていく。

そしてシュルツと森田が保健室の方へ斥候として向かった。

「ここはこんなところか？しかしあいつ子供の面倒見が良いな。」

「准尉は意外と面倒見いいですよ、厳しいですけど」

「戦車兵魂注入しても・・・この状況だ、役に立つかもな」

「いざとなったら、予備の戦車兵として使いますか？中尉」

クルツとバウアーが談笑しつつ彼らの後を追うがその時！

「動くな！！何者だ？この学校の者ではないな・・・？」

紫色の髪の女性が木刀をクルツに突きつける、返答しだいではただでは置かないといった様子だ。

「我々はドイツ国防軍第８中隊のエルンスト・バウアー中尉。君が武器を向けてるのはクルツ伍長だ。まあ信じるかどうかは君しだいだが・・・？、我々は名乗った君は？」

バウアーはやれやれといった様子で自己紹介をすると顎で女性をさす。

「私は私立藤美学園高等学校の３年の毒島冴子だ、ドイツ国防軍の軍人がなぜここに？」

「こっちが聞きたいくらいだ、なぁクルｔ・・・」

突然轟音があたりに響き、ガラスが揺れる。

「下からの様だ！しかもかなりの爆発音、先ほどの爆発も君たちの仕業だな？」

「毒島嬢、その話は後で聞こう、向こうに合流するぞ、急げクルツ！」

そのころ

「おい、石田とかいったな、窓にバリケード作れ今のうちだ！！」

「はっはい！」

「森田ぁ！そんなに外すなら撃つな。その辺の棒で殴って押し出せ！」

「あ、ああ」

「ちょっと、爆発物投げるなら先に言ってよ！」

「ええぃ、どいつもこいつも、役に立たん奴ばかりだ！」

シュルツが怒鳴りながらも＜奴ら＞に彼らがやられない様に守っている。ＭＰ４０が開けたドアから入ってきた＜奴ら＞を黙らせていく。

こうなった理由は少しさかのぼる。

「おい、森田ここが保健室だな？」

「はい、そうなんだけど、ん？生き残りが居るみたいだシュルツさん」

「ここをポイントに中尉を待つか・・・おい！？」

「助けに行きましょう！」

言うが早しか森田が保険室内に突っ込んでいく

「あのバカ、拳銃持たせるんじゃあなかったな」

シュルツも悪態を吐きつつ森田のカバーをしながら保健室に突入していく。

「岡田・・・ちくしょう！許せ！」

青年が雄たけびを上げながら<奴ら>と化した友人を仕留める。その後ろでおっとりとした感じの女性がぼやいていた。

「困ったわぁ・・・警察も消防も電話は繋がらないし、手当てしても噛まれた人は絶対に死んじゃうし、噛まれて死んだ人はリビングデッド化しちゃうし・・・まるでロメロの映画みたい」

そして女性が医療具を持ち出そうとする後ろで、青年が

「んな、感心してる場合ですか！逃げましょう静香先生！」

女性が返そうとしたとき。

「援軍登場！皆生きてるか！？いてっ」

「やかましい、突出するなバカが！味方も殺す気か？」

格好をつけて現れた森田に拳骨をいれつつシュルツが怒鳴る。

「きゃぁ！？貴方たちえーと・・・」

「2年の森田ですこっちはドイツ軍のシュルツさん」

その時、青年の後ろの窓にひびが入り、シュルツが怒鳴る

「こっちに来い眼鏡の青年！！後ろから来るぞ、銃の前には立つなよ？」

青年が下がった瞬間窓が割れ、そこから＜奴ら＞が大量に侵入してくる。だがシュルツがＭＰ４０で頭を打ち抜いていく。

「弾がそろそろ看板だな、おい、森田、眼鏡！ベッドを使ってバリケードを作れ！」

「石井です！」

「名前などどうでも良い、壁を作れ直ぐに第２波が来るぞ！」

シュルツはそう叫びつつ腰に５つある手榴弾を３つ束ね、収束手榴弾を作る。

森田と石井がベッドを起こし壁代わりにした時シュルツが「伏せろ！」と怒鳴り状況が読めてなさそうな鞠川を引き倒し収束手榴弾を＜奴ら＞が一番密集してる場所に頬リ投げた。

一瞬置いて大爆発である、爆心地に居たものは木っ端微塵に吹き飛び、多少離れた場所に居た＜奴ら＞も手足がもげるなどしてろくに動ける状態ではない。

「お前ら、生きてるな、失礼婦人、状況が読めてないようだったので引き倒させてもらった。」

「鞠川です！急に引き倒して、薬品が落ちちゃったじゃないですか！」

鞠川がシュルツを睨むが

「命あっての物だ、どの道噛まれたら即時昇天なんだ、薬品は余り意味がないぞ、アルコールと包帯があれば十分だ！」

「シュルツさん、復来ました」

鞠川にシュルツがそっけカランに返し、少し弱気になってる石井に

「俺に泣きつくな、畜生、俺が泣きたいぞ、玉も心ともないし・・・」

いざとなったらこれで自決するか？と物騒なことを言うシュルツに冗談にもならないこと言わないでくださいと総突っ込みを入れながらここまでかと頭をよぎった時。

「シュルツたちを助け出すぞ、毒島嬢突っ込め弾は当てん安心しろ！クルツ、味方に当てるなよ！」

２丁のＳｔＧ４４が唸りを上げ＜奴ら＞を葬る、そして的確な支援を受けた剣士が包囲網に穴を開ける。

「こっちだ！走れ！」

バウアーが手招きするとシュルツが立ち上がりベッドを倒し叫ぶ。

「今だ、死にたくない奴は走れ、包囲から抜けるぞ！」

鞠川を森田と石井が援護し保健室から逃がし、殿のシュルツも追いすがろうとする＜奴ら＞を打ち倒しながら手榴弾を一個置き土産に残した。

全員が保健室から出た瞬間爆発がおき、そこから離脱する。

「たっ助かった？」

「まっ、この世のこの有様だ、あの世のほうがまだ幸せかもしれんがな」

「そんな事を言うな、バウアー中尉、少なくとも我々は今生きている」

ふぅとため息を付いた石井にバウアーが茶々を入れ、毒島がそれを嗜める。

「准尉、無事でよかったです！」

「少なくとも、子守は当分ごめんだ」

保健室で守った3人を親指で指す。その2人は「俺って運が良い？」とか「まったく乱暴なんだから！」と口々に入っている。そして脱出へ話が移った時。

「車のキーなら職員室よ」

「貴方の車は、全員を乗せられるのか？」

「う”っつ、コペンよ・・・」

毒島と鞠川がそんな話をしている中でバウアーがこう呟いた

「コペンって何だ？」

「キューベルワーゲンの親戚ですかね？」

「違いますよ、２人乗りの小型車です」

「ほぉ未来にはそんな需要もあるのか」

この呟きに石井が突っ込み、バウアーは半世紀以上離れたジェネレーションギャップを感じていた。

「部活遠征用のバスならどうだ？」

「それですよ、毒島先輩！」

と森田が相槌を打つとクルツがバウアーに「我々の車は無事でしょうか？」と言ったので。

「クリューガー曹長が居るから大丈夫だとは思うが・・・よし、シュルツ悪いがお使いだ！森田と石井を連れて、クリューガーに合流して来い、クルツの拳銃とマガジンも渡す、行けるか？」

「無茶を相変わらず言いますな中尉、やってやりましょう、合流ポイントは？」

「彼らの言う、遠征用バスのある場所だ。森田は分かってなさそうだが石井なら分かるだろう」

「そっそんな～バウアーさん酷いですよ～」

そんな森田の言葉もスルーされ、シュルツが石井に聞く

「駐車場の場所は？」

「分かります！」

2人で会話を進めて行き、置いて行かれた感の強い森田は「何で俺を指名したんだよ」とぼやくがバウアーがフォローした。

「戦車は5人で動かすものだが最低3人居れば何とか一両は動かせる、それにこの中でまともに力仕事ができて地形にも明るいのはお前と石井だけだ、頼りにしてるんだ戦友！」

バウアーが肩を叩くと「そっかぁ～！俺頼りにされてるんだ！」と気分一転して顔が明るくなる森田。

「と言うわけだ、今度全員が、顔を合わせるのは、駐車場だ！こんなくだらん状態で死ぬことは許さん、欠けることなく集まるぞ！また会おう戦友たち」

バウアーが全員に向け言葉を飛ばすと、４人は職員室へ、３人はパンターを置いた場所へ別れていった。

また会うと約束して。

戦闘そして・・・（後書き）

こんな感じで3話終了です。
お便りが作者の力になります、要望や感想、アドバイスどしどしお願いします。

出会い（前書き）

とうとう、４話目です、見てくれてる方ありがとうございます！！

出会い

２組に散会したバウアーたちは職員室、シュルツたちはパンターと補給隊列と合流するために別々に行動を開始した！

〜〜〜バウアーサイド〜〜〜

「くそったれ、近づくな！」

近づいてきた奴らをバウアーは蹴飛ばしたり折れたほうきの柄で殴り飛ばしたりして対処し、後ろや残敵の排除はクルツと毒島が行う。

「バウアーさんでしたっけ、どうして銃でやっつけないんです？簡単に当てれるのに」

「あのなぁ「出くわすたび、頭を潰していたら、足止めされるのと同じだ取り囲まれてしまｕ「それで同僚が良くイワンに食われてたなそれに弾の無駄遣いだ」

『（バウアー中尉）（毒島嬢）私の言いたいことを言うんじゃない』

２人が言いたいことが大体被るので台詞の取り合いと成ってしまう。（ちなみに、バウアー→毒島→バウアー→２人です。）

それをクルツが苦笑いして見つめている。

「大丈夫なのかしらあの２人」

「まぁチームは上手く言ってるんで大丈夫でしょう」

鞠川が不安を漏らすがクルツの言うとおり、チームワークはぴったりだ。

ちなみにクルツは拳銃をシュルツに渡したので手元にあるのはＳｔＧ４４を肩に掛けバットを片手に持っている。

「でも、皆凄いのね・・・きゃ！」

ため息混じりに鞠川が追いつこうと歩幅を上げたとたん、足が絡んでこけてしまったのである。

「やーん、何なのよ、も～！」

「走るには向かないファッションだからだ」

言うや否や毒島が鞠川のスカートを腰の辺りまで引きさいたのだ。

「派手なことするじゃないか！」

「えっええ」

感心してるバウアーとは対照的に若干顔を赤らめ引いてるクルツ。

すると鞠川が悲鳴をあげ。

「あーこれプラダなのに～！」

「ブランドと命と・・・どちらが大切だ？」

とため息を吐きつつ返す毒島に鞠川はこう返した。

「・・・両方！！」

「生きてて何ぼのブランドだと思うがな。死体が着てても死装束なだけだ」

今度はバウアーが眉間を押さえながら呟いた。

「何よ！何か間違ってる！？」

「いろいろと間違ってるような・・・」

クルツの突っ込みがむなしく響くばかりである。

そのまま職員室に着くかと思ったその時

「きゃあああああ！！」

その場に走り寄ると、ピンクの髪の女性がドリルを近づいた＜奴ら＞の頭に突き刺していた。

「行くぞ！」　「ああ」　「了解」

3人が息を合わせると同時に近くに居た青年と女性にアイコンタクトを送り一気に片付けに掛かる。

「私は右の2匹をやる！」

「麗！！」

「左を抑えるわ！」

「後ろは任せてくれ！」

「撃ち漏らしは任せてください！」

麗と呼ばれた女性が、接近して即席の槍を顎の下から棒を脳まで貫通させしとめる。

毒島はそれに感心しつつ近づいてきた2匹を突きで突き放し一気に脳天に木刀を振り下ろす。

青年が突っ込み残りの一体の頭蓋をバットで叩き割った。

バウアーのＳｔＧ４４が3体なぎ払い勝負を付け、クルツがピンクの女性と小太りの青年のカバーに回る。

「高城さんっ！」

麗がピンクの髪の女性高城に近寄り、「大丈夫？」と声を掛けると弱弱しく「みやもとぉ～・・・」と返す中、残ったメンバーが自己紹介を始める。

「鞠川校医は知っているな？私は毒島冴子、３年Ａ組だ」

「小室孝、２年Ｂ組」

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよね！わたし槍術部の宮本麗です」

「あ、えと、び、Ｂ組の平野こ、コータです」

毒島が微笑むと平野の顔が赤くなる。

麗が「この人たちは?学校の人じゃあないですよね?」と言うと毒島が「ああ、彼らは・・・」バウアーが手を出し「構わん良い機会だ」と言い

「俺はドイツ国防軍エルンスト・フォン・バウアー中尉だ、訳が分からないうちに１９４４年からこの時代に居る。信じるかどうかは君達しだいだ」

「私はクルツ・ウェーバー伍長です、バウアー中尉と同じです、よろしくお願いします」

「後、ここには居ないが、オットー・シュルツ准尉や俺の部隊員も居る、途中、森田と石井と言うのを回収した、今は2人で俺たちの車を取りに行って貰っている」

孝も麗も高城も平野も呆然としていたが、平野が彼らの肩のＳｔＧ４４や腰のルガーを見ると人が変ったように「見せてもらっていいですか！?」と迫る。

「あっ、後でね」

クルツがその勢いに引きつつ、先送りにしておく。

「何さ、皆デレデレしたり、こいつら信じたり・・・」

高城がふらふらと立ち上がり、叫んだ。

孝が「何言ってんだよ、高城」と言うが、彼女は熱くなり続ける。

「その気になったら誰にも負けないのよ！」

涙目で叫ぶ彼女に毒島が「もういい、充分だ」と語りかけ、バウアーも「辛かったろう？」と言いそのまま、彼女は毒島に抱きつき泣き出した、それを全員が見つめるのみであった。

〜〜〜シュルツサイド〜〜〜

3人はバウアーたちと別れ、一路、戦車のある中庭の隅の隅を目指して走っていた、使える装備も心ともないがシュルツの闘志は衰えない、心配なのが森田と石井である。

「本当にこの方向で大丈夫なんだな？」

違ったら拳骨じゃ済まさんぞ？と睨むシュルツの迫力に内心びびりながら森田は答える。

「大丈夫ですよ、何度もサボりに潜り込んでますから！」

「お前、良く高校まで来れたな・・・」

シュルツはため息を吐きつつ、近寄ってきた＜奴ら＞の脳天に斧のようにスコップを叩き割む。

「凄いですね・・・」

「何このスコップが新品だったのと、スコップでの戦い方は接近戦の基礎だ、正直剣よりスコップの方が頼りになる！」

毒島嬢が聞いたらシュルツと乱戦になるような言葉だが、東部戦線で戦ってきた彼らにはこれが最高の相棒の一つであるのは確かだ。

「何せ、塹壕も掘れる、相手の喉を突いて（ピーー）するも良し。ハンマー代わりに殴っても・・・」

シュルツはスコップを掲げながらそう自慢げに続け、タバコに火を点けふぅと一息つきつつ、歩みを進める。石井が「学校内では禁煙なんですけど・・・」と言うと、

「いいんだよ、この状況だ、タバコでも吸わんとやってけるか。細かい奴だな」

と言いながら石井にヘッドロックを掛け、こう付け加える。

「状況にあわせて対応するんだ。ルールはあくまで自分達を守るものだ、そのルールで死んじまったら只のバカだ！」

上の無茶な命令につき合わされてきたせいか、こういうところはやらかく思考できる男なのである（隊長もそうだが）

「でも、煙と熱源であいつらが寄ってきたら、本末転倒ｄいてっ」

「お前は一言多いぞ森田！これは、あの死にぞこないどもが熱や煙に反応するか実験してたんだ、それにさっき吸っていたが反応しなかったぞ？」

森田に拳骨を入れながら、こいつは一言多くて上に目を付けられてえらい任務に参加させられて死ぬタイプだな、とか思いながら紫煙を曇らせた。

（いかん、いかん、こいつ等は俺の部下じゃない！なに考えてるんだ俺は！）

ふとシュルツは自分の息子ぐらいの青年達を見ながらこいつらを死なせないようにする教育法を考えていた。

部下でもなんでもないただの高校生に。だがむざむざこの日本人の青年達を見殺しにするつもりも毛根なかった。

「さて、行くか」

タバコの火を消し立ち上がり、シュルツは先に偵察に行かせた2人に追いつく為に急ぎ足で向かった。

「なぁ、俺達こう言うことでもなければ一緒に行動なんてありえなかったよな石井」

「ああ、問題児タイプの森田と組むとは思わなかったよ」

2人がさっきまでは名前しか知らないような関係だった、彼らは自分達のチームの異質さを再確認していた。

「森田、シュルツさんってどう思う？」

「そりゃぁ厳しいし、説教くさいし・・・でも、あの人たちが居な

かったら死んでたと思う、正直過去から来たってのはあんまり信じれないけどあの人達の行動と言葉は今は誰よりも信用できるさ」

「僕もそう思う、ここの教師よりもあの人のほうが信用できるよ」

「紫藤のくそったれと比べれりゃぁ、説教くさくて汗臭いシュルツのおっさんの方が１０００倍ましさ」

「森田・・・後ろ・・・」

「ゾンビは居ないし、シュルツのおっさんも向こうでタバコ吸ってるだろ？脅かそうったって無駄無駄」

森田が笑いながら、手を振っているが、自分の体に影が重なり、しっかり聞き覚えたドスの利いた声が聞こえてくる。

「ほぉ～～森田君誰のこと言ってるのかな？」

シュルツが鬼の形相で立っていた。

「ひっ、ひぃ、あれは比喩でしてその・・・あの・・・」

言葉が出てこず森田が目を逸らしていると、シュルツが片手で森田を持ち上げ。

「ほぉ～ら高い高い～！」

襟を掴んで首を絞めているので声が出ず、ぷらぷらさせてると、着地させ、拳骨を叩き込んだ。

「っつ〜〜〜〜〜」

頭を抑えごろごろと転がる森田にシュルツは「一言、多いぞ、ばかたれ」と言い石井に報告を聞こうとしたとき。

ＰＡＭ、ＰＡＭ！！

直ぐ近くで銃声が響いた。

「どうやら、パーティ会場は近いようだ、それにもう始まってるぞ！乗り遅れるな！続け！」

シュルツが走ると、森田と石井も顔を見合わせ頷くとシュルツについて行った。

道中に居た数体の＜奴ら＞は一体はシュルツにスコップで脳天を砕かれ沈黙し、隣に居たのもスコップを手放し紐でつるしていた腰の拳銃に持ち替え頭を撃ち黙らせる。

それに、続くように、森田は拳銃で、石井はＭＰ４０で１体ずつ仕留め場を制圧し、そのまま曲がり角を曲がった。

「２人やられました！！」

「直ぐに頭を撃ってよみがえる前に楽にしてやれ！」

クリューガーが指揮を執り、交戦を続けている、不意打ちで２人やられたが、それだけだ。

場所が場所だったおかげか迷い込んできた＜奴ら＞も数が少なく反

撃に転じたとたん一気に数を減らす。

そこに横から「味方だ撃つなよ！」と怒声を出しシュルツたちが飛び出し残りの＜奴ら＞を一気に仕留めた。

「シュルツ准尉！ご無事でしたか！」

クリューガーが走り寄りシュルツに敬礼をする。

「ああ、略式でいいぞ」

シュルツもそう言いつつも略式の敬礼で返す。するとクリューガーも森田と石井に気づいたのか、

「彼らは？」

「生存者だ、保護と教育しながらここまで来た。一応黒騎士の現地補充隊員にしておいた、この状況では人手は多い方がいいだろう？　先ほども言ったが、ある程度は仕立て上げたし、これからも教育していく予定だ、文句は言わせんぞ、曹長？」

「はぁ・・・了解！！」

クリューガーはこれで良いのかとこれからの前途を思いため息を吐きつつ敬礼で返す。私事は持ち込まないのは軍人として当然だと彼は思っているからである。

「中尉も無事だ、他の現地協力者を守りながら生き残りを集めて脱出する。バスのキーを取りに行った、我々の車両は動くか？」

「復、中尉は・・・はっ、無事であります！全車稼動できます、パンター隊長車も車長の中尉と砲手のクルツ伍長が不在なだけで、動かすだけなら可能です」

「よし、全員乗車！合流地点の駐車場へ急ぐぞ！」

『あの、シュルツさん俺（僕）達は・・・？』

「良し、石井は俺の戦車に乗れ！道案内だ、森田はＭＧ４２を持ってクリューガー曹長のトラックに乗れ！道案内といざという時の火力支援だ！」

言うが早いか、直ぐにシュルツが２号車に飛び乗り、石井を詰め込む。

クリューガーの方も、トラックのＭＧ４２を森田に渡すと、使い方を簡単に説明した後、運転しながらしますと言い、自分のトラックに詰め込み自身も乗り込んだ。

そして部隊の全員がトラックに乗るとシュルツが無線で『パンツァーフォー！』と言うと鋼鉄の猛獣達はエンジンを唸らせて前進した。

合流は成功するか！？

出会い（後書き）

４０００文字超えただろうか・・・それだけが心配です。

感想、アドバイスなどどしどし募集しています！

後、森田と石井のフルネームは何でしょうか？口調は合っていますでしょうか？ぜひ教えてください。

相談（前書き）

繋ぎ会です、そんなに長くないかもしれません

相談

「こんなもんか？各員協力ご苦労、一休みしよう」

『はい』

男性陣をまとめるバウアー達がバリケードを作り一休みしようとしていた。

「ははっ、皆、息があがってるぞ！その調子じゃあ、イワンに食われちまうぞ」

「中尉、彼らは学生です、このようじゃ軍事教練も受けてないでしょう、少し酷ですよ」

クルツがまぁまぁとなだめるとバウアーもそこまで本気では無かったようで笑いながらこう返した。

「わかってるさ、この様じゃあ、冗談も言いたくなるさ」

「中尉、我々は冗談言い合える状態ですが、彼らは息があがっています、見てください」

クルツが周りを見回すと孝と平野は余り変わらないようだが麗と毒島は一休みと言った感じであるが鞠川は机にぶっ倒れている。

高城は・・・居ない？

しかし、水音がするということは、向こうで顔でも洗っているのだろうとクルツは思っていた、彼女は血を顔に大量に浴びていたなと思いながら居ると、向こうから。

「高城さん大丈夫ですか？あっ眼鏡・・・」

「だから何？コンタクトがやたらずれるのよ！」

バウアーとクルツが青春してるなぁ～・・・としみじみしながら眺めていると、孝が

「鞠川先生、車のキィは？」

「あ、バッグの中に・・・」

「鞠川、悪いがそれはコペンとか言う車では無かったか？」

「2人乗りなんですよね」

バウアーとクルツが思い出したように注意を入れると鞠川が「う”っつ」と言った声を出し、毒島がやれやれといった感じで

「だから我々はバスを取りに来たんだろ、壁のカギ掛けにキィがあるが」

バウアーが同じ窓際に居た平野に「まだあるのか？」と聞くと。

「まだあります」

「シュルツ達はまだ着いては居ないようだな」

２人が眺めてる裏で鞠川が孝に

「バスはいいけど、どこへ？」

「家族の無事を確かめます、近い順にみんなの家を回るとかして必要なら家族も助けて、そのあとは、安全な場所を探して、クルツさん達も・・・」

孝が最後にクルツの顔を見ながら言うと、クルツは笑顔で

「私達は大丈夫ですよ。ドイツ人なうえにここは６０年以上の未来に居るようですし、君達に同行しますよ。ですよね中尉！！」

「ああ、別にすることも無いからな、君達について行ったほうが色々便利そうだ！我々は君達に協力する。君達は土地勘に明るい、いいコンビじゃないか」

バウアーがＳｔＧを上に掲げながらにやりと笑う。

「しかし、安全な場所なんかあるんでしょうか？」

クルツが顎を押さえながら意見を出すと、高城が

「見つかるはずよ、警察や自衛隊だって動いてるはずだから地震のとき見たいに避難所とかが・・・どうしたの？」

先ほどからテレビに食いついて動かない麗に高城が反応した。

「なんなのよこれ・・・」

「麗どうした・・・！」

話しかけつつ視線をテレビに移した孝も硬直した、毒島がチャンネルを変える。

「クルツ見ろ、綺麗な原色フルカラーだぞ！凄いな」

「凄いですね、殆ど白黒でしたし・・・」

「あんた達のカルチャーギャップはどうでも良いのよ！！」

２人の感銘を高城の突っ込みが打ち消しテレビに集中する。後ろが騒がしいが無視することにしたようだ。

『各地で頻発するこの暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました。しかし自衛隊の治安出動に対しては与野党を問わず慎重論が強く・・・・」

孝が「暴動って何だよ暴動って」と言うが、毒島がチャンネルをさらに変える。

「これが暴動なら敗戦後のドイツはさぞ動く死体が多かっただろうよ・・・・」

バウアーがさしているのは第一次世界大戦後であるが、少しは自らの未来もさしているのだろう。

『すでに地域住民の被害は１０００名を超えたとの見方もあります知事による非常事態宣言と災害要請は・・・

ＰＡＭ！ＰＡＭ！ＰＡＭ！
発砲ですついに警察が発砲を開始しました状況は分かりませんが・・・『

キャスターの後ろの死体袋が起き上がり、とたん画面に砂嵐が混じり始める。

『きゃあああああ、いや、なにっ、うそっ、た、助けっ、うあっ、ああああああああ！！』

画面が変わり、しばらくお待ちくださいの画面の後、スタジオに画面が切り替わりキャスターが

『何か問題が起きたようです、こ、ここからはスタジオよりお送りします』

「それだけかよ・・・、どうしてそれだけなんだよ！」

「パニックを恐れているのよ」

孝の問いに高城が答える、麗が「いまさら？」と問うが高城はより詳しく語りだす。

「いまさらだからこそ、よ！恐怖は混乱を生み出し、混乱は秩序の崩壊を招くわ、そして秩序が崩壊したら・・・どうやって動く死体に立ち向かえるというの？」

「誰も、立ち向かえんな、よしんば居てもあいつらの良い餌になっておいしく食べられて御馳走さまだな。」

「そう、その後はあいつらの仲間入りってわけ」

高城の意見にバウアーがつけたし、高城もそれに同意する。

テレビのアナウンスは淡々と続き

『屋外は大変危険な状況になってるため可能な限り自宅から出ないでください、また自宅の窓・入り口はしっかり施錠し窓などは可能な限り補強してください。

何らかの理由により自宅に居られなくなった場合各自治体の指定した避難場所に・・・』

さらにチャンネルを変えると。

『全米に広がったこの異常事態を収集する見込みは立っておらず合衆国政府首脳部はホワイトハウスを放棄洋上の空母に政府機能を移転させるとの発表がありました。

なおこれは戦術核兵器使用に備えた措置であるとの観測も流れております、なお現在の時点でモスクワとは通信途絶、北京は全市が炎上、ロンドンは比較的治安が保たれていますが、パリ、ローマでは略奪が横行・・・』

バウアーは毒島からリモコンを取りテレビを消した、祖国の様子は見たくないと言うかのように。

「珍しいな、貴方が気にならないとは。ドイツ人なのでしょう？」

「多少は気になる、だがそこは俺達の後輩を信じてるさ」

毒島の問いにバウアーはそう答える。

「朝ネットを覗いた時はいつもどうりだったのに・・・」

「信じない、信じられない・・・たった数時間で世界中がこんなになるなんて」

平野と麗の言葉が弱弱しく響く、麗が孝にしがみつき。

「ね、そうでしょ？大丈夫な場所あるわよね？、きっと直ぐいつも道理に・・・」

「なるわけないしー」

「そんな言い方すること無いだろ！」

高城がやれやれといった風に言いそれに孝が突っ込むが高城はさらに言葉を続ける。

「パンデミックなのよ？仕方ないじゃない！」

「パンデミック・・・？」

孝の疑問に高城が答える。

「感染爆発のことよ！世界中で同じ病気が大流行してるってこと」

「インフルエンザみたいなものか？」

「１９１８年のスペイン風邪はまさしくそうね、バウアーさんもしかしたら知ってる？」

「ああ、俺が5歳のころ大流行したな、近所の奴が2，3人は少なくとも死んだな」

バウアーの回答に高城はうなづきながら話を続ける。

「それよ、最近だと鳥インフルエンザにその可能性があると言われてたわ、インフルエンザをなめちゃいけないのは分かってるわよね？
スペイン風邪なんかは感染者は6億人以上、死者は５０００万になったんだから・・・」

「それより１４世紀の黒死病に近いかも・・・」

鞠川の意見に高城が即答し。

「その時はヨーロッパの3分の1が死んだわ」

「どうやって病気の流行が終わったんだ？」

孝の問いには今度は鞠川が答える。

「いろいろ、考えれるけど、人間が死にすぎると大抵は終わりよ。感染すべき人が居なくなるから」

平野が窓を見ながら呟く

「でも、死んだ奴は皆動いて襲ってくるよ」

鞠川が閃いたようで発言する。

「これから暑くなるし肉が腐って骨だけになれば動けなくなるかも」
「どれ位でそうなるのだ？」
鞠川の言葉に毒島が直ぐに返す。
「夏なら二十日程度で一部白骨化するわ、冬だと何ヶ月もかかる、でもそう遠くないうちには・・・」
それにも異議があるようで高城が突っ込む。
「腐るかどうか分かったもんじゃないわよ」
「どういう意味だよ？」
孝が聞き、高城が返す前にバウアーが一言入れる。
「要するにだ、少年、普通は死後１０分で死後硬直が起こり、そこから加速的に腐敗するんだ、だがあれらには死後起こる症状が殆ど起きない」
「そう言うこと、動き回って人を襲う死体なんて医学の対象じゃないわ、下手をするといつまでも・・・」
毒島がそう言うのは専門家の話すことだといわんばかりに中断させ現状の意見をまとめた。
「家族の無事を確認した後、何処に逃げ込むかが重要だな、ともかく好きに動いていては生き残れまい、チームだ、チームを組むのだ。生き残りも拾っていこう」

「この人数では、分隊が良いとこの規模だな、俺はあくまで協力者兼アドバイザーだ、そこまで面倒は見れんと言うか、家の部隊の指揮でも手一杯になりかねんからな、見捨てはせん、何処でも付き合うぞ」

「中尉も分かりにくく言って・・・、我々もチームです、中尉一人でこの状況は予測して指揮はできないし、死んだ時大変だからと言う意味を抜かしてるんですよ」

クルツが笑顔でバウアーの言葉にフォローを入れ「我々は戦友ですよ」と付け加える。

「どこから外へ？」

「ここの地理には明るくない、案内は任せたぞ！」

麗の問いとバウアーの期待孝はしばらく黙った後・・・

別の廊下に彼らは飛び出し。

「駐車場は正面玄関からが近い、行くぞ！」

「分かったフォローは任せろ」

通り道に居た2体の＜奴ら＞は平野の釘打ち機とバウアーの射撃で黙らせる。

孝とバウアーを先頭にしてその後を毒島、平野、麗、鞠川、高城、クルツで陣形を組み飛び出した！

相談（後書き）

これで終わりです、モチベの維持が最大の敵ですが、続きの巻を呼んで想像すると自然と続きが書きたくなるので今は大丈夫みたいです。

おまけ

ヴィットマン「こんな駄文書きやがって、作者は病気だ！」

炒り豆「黙れ、これは二次創作、俺は作者、お前らは登場人物お前達が居なくては作品が書けんのだ！第一、出番がまだだからって・・・」

ヴィットマン「俺もお前も病気って訳か、だがその発言は戴けんな・・・教育してやる！弾種榴弾フォイヤー！！」

炒り豆「なっ、何をするだーーっ！！」

ＤＯＯＯＯＯＯＯＭ

ヴィットマン「今回はこれまでだ、感想、質問、何でもよこしてくれ、それではまた会おう、ジークハイル！」

合流（前書き）

学校編終了です。

合流

8人が陣形を組みながら移動しながら、最終確認をする。

「最後に確認しておくぞ、無理に戦う必要はない避けられる時は避けろ！転がすだけで良い！」

「取りこぼしは俺達が仕留めておいてやる、安心して進め！」

毒島の念押しにバウアーが合わせるようにつなげる、そこに高城がつけくわえる。

「連中、音にだけは敏感よ！それから普通のドアなら破るくらいの腕力があるから掴まれたら食われるわ！気をつけて！」

「キャアアアア！」

「！」

「今のは悪いお手本だな、行くぞ、見殺しにはできん！」

バウアーが走り出し後に孝が続く、他のメンバーもその後に続き走る、すると階段で男女数人が＜奴ら＞に囲まれていた。

「卓造・・・」

「くそっ、下がってろ！」

バットを持った少年が身構えた時、近くに居た＜奴ら＞が3体崩れ

落ちた。1体は頭に釘を、残りの2体は大穴を空けられていた。
次の瞬間、毒島が階段からの勢いを利用して、木刀で頭をかち割り
続く孝と麗がバットとモップで蹴散らす。

「あ、ありが・・・」

「大きい声は出すな、噛まれた者はいるか？」

「え・・・居ません、居ません！」

毒島の問いにそばかすの少女が答える。

麗が様子を見ながら。

「大丈夫みたい、本当に」

これを聞くと孝は

「僕らは学校から逃げ出す、一緒に来るか？」

「規律乱したりしたら、許さんがな」

「中尉、脅かしてもしょうがないでしょ・・・」

バウアーの言葉にクルツが突っ込みながら、「来るのか？」とバウアーが確認すると、彼らはうなづいた。

孝がバウアーに聞く

「なんで、あんなに脅すことを言うんです？」

「飴と鞭だ、お前らは優しい、だが集団になるとそうはいかん、誰かが嫌われ者になっても規律を守らせないといかん、お前達が飴で俺が鞭をやれば良い話だ」

「損な役回りですね」

「慣れてるさ」

孝に返しつつ、行くぞと言い、彼らは前進した。

孝が靴箱の陰に隠れる、彼らはそのまま、靴箱前までやってきたのだが＜奴ら＞の数が多く靴箱の陰でやり過ごしていた。

「やたらと、居やがる」

「この程度、イワンに比べれば可愛いもんだ、手榴弾で吹き飛ばして」

「待ちなさい、ここで爆発なんて起こしたら連中が寄ってくるでしょ！？」

「冗談だ」

バウアーが手榴弾を取り出すと、高城からすさまじい突っ込みが入り中止する。

「そもそも、見えてないから、隠れることなんて無いのに」

「じゃあ、高城が照明してくれよ」

そう孝が言うと高城も困惑する、フォローするように毒島が

「たとえ高城君の説が正しいとしてもこの人数では、静かに進むことなどできん、校舎の中を進み続けても襲われた時、身動きが取れない」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

毒島の過程に麗が結論を出す。そして毒島は確認するように。

「誰かが、確かめるしかあるまい」

誰が・・・そう思い孝は周りを見回し、最後にバウアーと目が会い、バウアーがうなづき、覚悟を決めたところで。

「「よし、俺が行
こう
（くぞ）！？」」

二人の声が被った、そして2人が

「バウアーさんはそこに居て皆を・・・」

「いいや、ここは俺に任せておいてくれ、この集団を掌握してるのは間違いなくお前だ孝！」

バウアーは孝の肩をもち、その一つの目で目を合わせる。
2人が説得しあってるその裏で。

「君、君」

「俺ですか？」

クルツがタオルを首に掛けてる青年に話しかける。

「そのタオルの掛け方だと、確実にやられますよ」

「えっ・・・？」

「その、タオルの掛けかたしていた同僚が、イワンに首絞め殺されました、そんな予感がするんです・・・タオルを使うならこうですね」

タオルをクルツが取り、頭に巻きつけた。

「これで、良いと思いますよ、目に汗も入りませんし・・・」

クルツがしてやったり顔で良い笑顔をしている。

「孝・・・なんで？」

「何でかな」

「何もかも面倒じゃなかったの？」

麗と孝の掛け合いが続き、バウアーは早く来いといった風に待って

いる。

「今でも面倒だよ」

そう一言言いバウアーに合流した。

「いいのか？向こうで何か言ってるぞ？」

「いいんですよ、行きましょう」

麗が駆け出そうとするのを毒島が抑えている、そして、孝の後にバウアーが続く形で玄関前まで来た。

孝の手が震える、だが毅然として其処に立つ、＜奴ら＞は反応しない。

「見えてないようだな・・・」

「ええ、それなら」

バウアーの確認の後孝が足元のシューズを向こうにほおり投げた。

そして扉を開きメンバーを誘導する、毒島が前衛を勤め、バウアーと孝が扉を守り、クルツが後衛を務める。

メンバーが次々と外に出る、そして最後尾のクルツの前の青年の刺又が扉の冊子に当たった・・・

『ガキィィィィン』

周囲の＜奴ら＞が反応しこちらに向かってくる。

「走れ！！」

「突っ走れ！急げ！ケツは俺達が持ってやる！」

孝が叫び、バウアーが怒鳴る、２人に高城が

「何で声出したのよ、黙っていれば手近な奴だけ倒してやり過ごせたかもしれないのに！」

飛び出した毒島が＜奴ら＞を木刀の一閃を食らわし頭を砕き倒す。

麗がモップの柄で足を払いながら。

「あんなに音が響くんだもん、無理よ！」

クルツが背後を守りながら、ＳｔＧで撃ち倒す、バウアーが同じくＳｔＧを使い道を切り開きながら。

「口より、足を動かせ、うだうだ言う奴はケツを蹴っ飛ばすぞ！！」

そしてバスが目前に来たとき、誰かが「もう直ぐだ！！」と声を上げた。

「やあっ」

先ほどクルツにタオルを頭に巻きつけられた青年がバットで＜奴ら＞の肩を殴りバランスを崩させる。

しかしそのまま掴みかかってきたが、掴まれるものを首に置いてなかったおかげで手が空を切る、そのままクルツが数体の頭を打ち抜き、

「ねっ、言った通りでしょ？」

「えっ、ええ・・・」

クルツがウインクしながら答える。すると向こうから「卓造！」と声が聞こえる。

「恋人を泣かせるものじゃないですよ。支援しますから前へ」

クルツが安心させろと言わんばかりに背中を押す。

そして其処にエンジン音が響きわたる。

ＶｕＯＯＯＯＯＯ！

「「来た！（俺達の）（我々の）車が！」」

バウアーとクルツが歓喜の声を上げる。

彼らの愛車パンターＧ型のマイバッハＶ１２型ＨＬ２３０　Ｐ３０エンジンが唸りが猛獣のうめき声のように響き渡る。

＜奴ら＞の半数はその音に惹かれ誇り高き黒騎士の豹に群がるが、気高き豹はその７０口径　７．５　ｃｍ　ＫｗＫ　４２と言う鋭利な牙から吐き出された榴弾で跡形もなく消し飛んだ。

「シュルツ！間に合ったか！」

「中尉殿！パーティはまだ終わってませんね！？」

「ああ、お客さんを一杯待たせている、無駄弾は撃たず支援してくれ！」

「了解！！よくやったぞ石井！遅刻せずちゃんと合流できたな！」

シュルツが石井の頭を乱暴に撫で回す、石井もまんざらでもない様子だ。

孝達はそのまま、バスに乗り込み、平野が窓から支援している。

「支援なら任せてくれ！」

森田がトラックの窓からＭＧ４４を撃つ（クリューガに半分以上手助けされてるが）

「シュルツ！戦車のほうは任せた！俺とクルツはバスに乗って打ち合わせる」

シュルツとクルツが入れ替わるように戦車に乗り、バウアーとクルツもバスに飛び乗り毒島が叫ぶ。

「小室君！全員乗った！」

「先輩が先に！」

2人が飛び乗りその裏で鞠川が成れないバスの操作に戸惑っていたが、ドアを閉めようとしたとき。

「・・・くれぇっ！！」

眼鏡の細い男に先導される形で十数名がこちらに走ってくる。

「誰なんだ？」

「俺にも・・・」

「3年A組みの紫藤だな」

と毒島が答える、その言葉の裏で麗が

「・・・紫藤」

と憎しみに満ちた目で睨んでいた。

「もう出せるわよ！」

鞠川がそう声を出すが、孝が

「もう少し待ってください！」

「前にも来てる、集まりすぎると動かせなくなる」

と2人がやり取りを交わすがバウアーが窓を開け。

「シュルツ！バスの前のあいつら吹き飛ばせ！」

怒鳴ると、シュルツもこう返した。

「了解！、ついでに前衛を張ります！」

と言い、パンターが榴弾で＜奴ら＞の群れを吹き飛ばしバスの前衛を勤める形で前に出た。

「ありがとうございます、バウアーさん」

「何、困ったときはお互い様だ」

「こんな、切り札持ってるなら、早く出しなさいよ・・・」

礼を言う孝に答えるバウアー、高城はジト目でパンターを見てる。

その時、麗がバウアーと孝に飛びつき叫んだ。

「あんな奴助けること無いわ！」

「麗！何だってんだよ、いったい！」

「助けなくて良い、あんな奴死んじゃえばいいのよ！！」

2人が怒鳴りながら、会話するのを見ながら、バウアーはその紫藤と言う男を捜した。

「皆さん、急いで！絶対に助かりますよ！」

「はい！先生！」

「（と、いってもこのままではたどりつけるかどうか・・・）」

バウアーはその残った片目を細め大体の見当を着けた。

「（あの、眼鏡の男が紫藤か・・・たしかに俺とは会いそうに無い目をしてるな）」

バウアーが人物評価をしている中、こけた眼鏡の青年が紫藤の足にしがみついた。

「せ、先生！足首を挫きました！」

「おや、そうですか・・・ではこれまでですね」

振り向きながら青年の顔に蹴りをねじ込んだ。

「離しなさい！！」

眼鏡が砕け刺さり鼻が砕けたのだろう、のた打ち回っている青年に吐き捨てるように。

「今までの世界は終わってしまったのです、力の足りないものに生き残る価値はありません」

バウアーはそれを見たとたん、ああこいつとは絶対に同じ天は見れんなと確信した、彼の居た戦線では助けようとも助けれなかった命が多かった。

力のあるなしでは無いのだ、どいつもこいつも手から零れ落ちる、

徴兵もあったが志願した彼らですらそうなのだ、それが覚悟の無いこんな学生達にはなおさらだと・・・

「（くそったれ・・・）」

心の中で毒づくなか彼らが乗り込んできた。

「鞠川先生！」

「行きます！」

孝が合図を出すとバスは前進した！

紫藤が毒島に、

「助かりました、リーダーは毒島さんですか？」

「そんな者は居ない、逃げるために協力しあっただけだ」

そう毒島が答える。そしてバスは、パンターの後に続くが、それでも残ってる＜奴ら＞が居るが鞠川は「もう人間じゃない・・・」と自分に言い聞かせ＜奴ら＞を引き飛ばす。

そして紫藤が口を開く。

「それはいけませんね・・・生き残るためにはリーダーが絶対に必要です目的をはっきりさせ秩序を守らせるリーダーが・・・」

だが彼は、バウアーが蛇のように睨み付けていたのにも気づいていなかったが。

麗が孝の腕を掴みながら。

「後悔するわよ・・・絶対に助けたこと後悔するわよ!!」

「どうしたんですか?、貴女も中尉も彼が入ったときから様子が・・・」

孝は心の中で

「(クルツさんの言いたいことはよく分かる、それが何を意味しているのか、さっぱり分からなかった、僕は紫藤のことをほとんど知らなかったのだ、それにその時の僕は外の世界で何が待ち受けているのかという不安だけでいっぱいだった)」

合流（後書き）

感想や要望質問、お気に入り登録などが作者の力になります。

これからもよろしくお願いします！

そして・・・（前書き）

1巻分終了です、何だかやり遂げた気分です、後６冊がんばるぞ！

そして・・

とある県道。ただむなしく風の切る音だけが木霊する。

そしてその近くのコンビニの近くの道に<奴ら>が一体居るだけである。

そしてそのコンビニに<奴ら>が向かおうとしてるとき、バスがその<奴ら>を引き飛ばした。

その間コンビニの店員は微動だにしていない、そしてその車内からこの話は始まる。

「だいたいよぉ！」

目つきの悪い頭頂部を染めた青年が喚き散らす、車内の雰囲気は最悪である。

それぞれのさまざまではあるが、とても和やかとか助かったとか言う物ではない。そして復その青年が言葉を続ける。

「何で俺たちまで小室たちに付き合わなけりゃいけないんだ？

「お前達が孝の目的行きと言うバスに乗ったからだ」

言葉を続けようとした青年にバウアーがさえぎるように言うが彼は忌々しそうな顔でバウアーを睨むが、

睨み返され小さくひぃと言い言葉を続けた。

「お前らが勝手に町に戻るって決めただけじゃんか」

バウアーが何も言わないのでそのままの調子で。

「寮とか学校の中で、安全なとこを探せばよかったんじゃないのか！？」

その時バスが横転したバスと各坐したトラックに足を取られブレーキを掛ける。近くを通った車から、

「何してんだ、殺すぞ、こらぁッ！」

と怒鳴る。するとパンターからシュルツが頭を出したシュルツが

「うるせぇ！急に出てくるな、軍用車優先だ、踏み潰すぞ！」

「ひぃ、すいません」

と怒鳴ると、向こうも急に大人しくなった。

車内に描写を戻そう。

「そうだよ・・・このまま進んでも危ないだけだよ・・・どこかに立てこもった方が、さっきのコンビニとか・・・」

根暗そうな青年もそう言うが、彼にいたってはバウアーの方は見ていない。おそらく怖いのであろう。

上を飛ぶヘリから人がばらばらと落ちていくのを見て運転中の鞠川

や隣に居た麗、クルツはうげぇと顔をしかめる。
そのまま鞠川は近くの空き地に車を止める。黒騎士の車両も一緒に停止する、するとさっきの青年も便乗して。
「今からだって遅くない、大体俺は・・・」
言葉を続けようとしたところを鞠川が遮って
「いい加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんかできない！」
「～～～～～～ッ」
青年はそのまま黙り、八つ当たりする相手を探そうとして、バウアーと目が合い睨まれ、孝に絡み始めた。
「んだよぉっ、何見てるんだ！？やろうってのか？」
「ならば君はどうしたいのだ？」
毒島が、やれやれと言った風に質問する。
「うっ・・・気にいらねーんだよ、こいつがきにいらねーんだ！、なんなんだエラそうにしやがって！」
平野が釘打ち機を構えようとするのを高城が止める、バウアーはただ沈黙している、クルツにいたっては「こいつら助かる気あるのか？」と呟いている。
孝も言われっぱなしでは無く、

「何がだよ？俺がいつお前に何か言ったよ？」
麗がもう許せれんといった風に立ち上がるが、バウアーが抑え、バウアーがにらみ合ってる2人のほうに行くと。
「なぁあんただってそうおｍ・・げはぁ！？」
バウアーが腹に鋭い鉄拳を腹に叩き込み、顔面パンチのコンボに繋いだ。
鼻は砕け血だらけになり、吐しゃ物を吐きながらうめき声を上げのたうち回ってる、他の面々はさまざまな顔で見ている。クルツはやれやれといった様だ。
「そんなものか？青年、気に食わないなら降りると良い。そうだろう？
ついでに君の頭は赤く染めると良い。こんな時にこれだけ口が回るんだ、鶏そっくりに成るだろう、立て、俺にも言いたいことがあるんだろ？」
バウアーが睨みながら言う、クルツが近づいてきて「力を入れすぎです中尉」と耳打ちする。
「麗、バウアーさん・・・」
「孝、バウアーさん」
「気にすることは無い、騒がしい鶏を黙らせただけだ」

すると、今まで黙っていた紫藤が拍手を始める、麗が嫌悪感をむき出しの顔になる。

「すばらしい、チームワークですね、お3方！しかし、こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっています、だからリーダーが必要ですよ、我々には！」

紫藤がそう主張するが高城が

「でも、候補者は2人いるわよ？」

「何言ってるんですか、彼は先ほど問題を起こした、さらに学校の関係者ですらない、私は教師ですよ、そして皆さんは学生と部外者です、それだけでも資格の有無ははっきりしてます」

そして紫藤が振り向き

「どうですか、みなさん？私なら問題が起きないように手を打てますよ？」

殆どの生徒が拍手しようとする中、一人手を上げる。

「卓造！？」

「あの、やっぱりバウアーさんかクルツさんがリーダーの方が良いと思うんだけけど・・・」

クルツのアイデアにより一命を取り留めた卓造とその彼女である。だが彼らは周りから一気に睨まれ、孝達の方に移動する、すると周りから拍手が始まり、全員感動したかのように拍手している。

そして得意げな顔でこちらを向いて紫藤は、

「と・・・いう訳で多数決で私がリーダーということになりました」

他の面々は悔しそうな顔でそれを見ている、それを見てバウアーはそれを見て一言で吐き捨てた。

「くだらん茶番だな」

「ほぅ、多数決で決まったリーダーに納得がいかないと？」

「悪いが、俺の祖国は民主主義じゃないんでな、従う理由がない、それに俺はお前が気に入らん」

「お前！リーダーの先生に従えれないのか！」

紫藤とバウアーの掛け合いに、少年の一人が空気を読めずバウアーに噛み付いた。

「ほう、自分じゃあかなわんと見ると、格上に懇願か、雑魚の典型だな少年」

バウアーが一言で黙らせる。すると麗が鞠川に

「先生開けて・・・開けてください！私降りる！降ります！」

「え？でもあの」

と鞠川が戸惑っていると、麗は反対側のドアを開けて飛び出した。

「・・・・・・麗！？」

孝が呼び止めようとすると。

「イヤよ！そんな奴と絶対一緒にいたくなんかない！！」

それを紫藤は白々しい困り顔で

「行動を共に出来ないと言うのであれば、仕方ありませんね・・・」

孝がそれを睨みつつ

「何言ってるんだ、あんた・・・！」

と言って孝もバスから飛び降りた

「本性を出し始めたなリーダーさんよ、俺からのお祝いだ！」

紫藤の腹に鋭い一撃をかましてバウアーも飛び降りた。

紫藤が何かうめているが無視して孝と麗に近寄ると2人は言い争っていた。

「街までだ、町まで我慢するだけじゃないか、それに歩きじゃあ危険・・・」

「だから後悔するって言ったのよ」

「その通りだな、それに奴に従っていると、街じゃあ降りれんぞ。お前達の目的をはたせられん」

２人の会話にバウアーが入る、孝が引き戻そうとするが。

「ともかく今は・・・」

『ぷわあん』

バスのクラクションが孝の言葉を遮った。

「何やってんだ、ぶつかる・・・」

３人は見えてしまった、地獄絵図となったバスの車内が・・・

すると、バスが各坐していた車に猛スピードでぶつかり宙を舞い横転、大爆発を起こした。

バウアーと孝がとっさに麗をかばう。

振り向くと一面火の海だった、運良くバウアーのパンターが火の壁よりバウアー側のほうで止まっていた。

バスから毒島とクルツが飛び出し。

「小室君、バウアーさん、大事ないか！？」

「中尉！」

火の海から燃えながら＜奴ら＞が出てくるのを木刀で突き飛ばす、しかし、他の＜奴ら＞も立ち上がるがクルツがＳｔＧでなぎ倒す。

孝が、意を決して叫ぶ。

「警察で、東署で落ち合いましょう！」

「時間は？」

「午後5時に今日が無理なら明日の同じ時間で！」

「クルツ！向こうについて行け俺もこいつらと動く！シュルツにも伝えてくれ！」

「了解！」

確認すると、毒島とクルツはバスに戻り、毒島が鞠川に

「鞠川校医！ここはもう進めない」

「分かったわ、戻って他の道を！」

高城と平野達がバスの窓から覗く、しかしバスはバックし別の道に進む。

3人も、バウアーが先導し、孝が麗の手を掴み。

「急ごう、麗！」

「うん！」

「お前ら、上に居るぞ！」

バウアーが構えるより早く、孝の服を掴み組み付いてくる、しかし被ってるヘルメットのせいで噛み付けず頭突きになっている。

「がっ・・・、このやろうっ」

麗が、コンクリートブロックで頭をかち割り仕留める。

「お見事、運が良かったな、孝」

バウアーが助け起こす。

「街まで歩き？」

「他に方法が無ければ・・・」

「俺のパンターに乗るか？ぎゅうぎゅう詰めになるが・・・」

「他に方法が無ければ、お願いします、いやまて、あいつメットを・・・」

付近を捜すと、バイクが乗り捨てられていた。

「2人乗りだな、俺はパンターで追う、先導よろしく！」

「はい！」

孝が、バイクを起こし、エンジンを掛ける、すると麗が

「免許持ってたっけ？」

「無免許運転は・・・高校生の特権！！」

バウアーもパンターに乗り。

「こっちも行けるぞ！」

後ろに麗を乗せた孝のバイクにバウアーのパンターが続く。

3人の終わりの旅は始まったばかりである

そして・・（後書き）

ちなみに、森田と石田はシュルツとクリューガーにどやされたりしています。
後、卓造の上の名前とその彼女の名前募集中です。
感想、質問、要望どしどしください、待ってます！

キャラ紹介　黒騎士物語（前書き）

今回は、黒騎士物語のキャラ紹介です。
学園黙示録しか知らないと言う人も、どっちも知ってる人もおさらいとして、ウィキを元に作者の注釈も入れてます。

キャラ紹介　黒騎士物語

エルンスト・フォン・バウアー（１９１３年１月２８日　－　１９４５年５月９日）
最終階級は大尉で、本編の準主役だが今作では主役その１。当初は第８中隊長で中尉だった。物語中で右目を失明して眼帯をしている。軍規違反（これは現場判断で適切な後退を出したため）の為に中隊ごと戦車なしで戦車猟兵となった後に父エミールの１２軍（架空の舞台）直属戦車中隊「黒騎士中隊」の中隊長となり大尉に昇進する。その後は中隊と共に東部戦線を転戦して１９４５年１月１０日に騎士十字章を受章、同年５月９日の最後の戦闘で戦死した。
今作ではエピソード９～１３の間に転移している為まだ中尉であり騎士十字章も受賞していない、彼の隻眼にはこの終わる世界はどう写るのであろうか・・・
（名台詞：情け無用、ファイヤー！、お前達は充分に義務を尽くした古いドイツの為に死ぬべきではない。新しいドイツの為に生きろ。ジーク・ハイル！（祖国万歳！）　バカモン！！俺のケツをなめろ。交信終了！！　など）

クルツ・ウェーバー
最終階級は軍曹、当初は上等兵で中隊長車の装填手、軍団直属部隊としての再編以降は中隊長車の砲手に、後半の新車両受領以降には０２号車の戦車長となっていた。このあたりでは本編でも一流の戦車乗りになっている。
本編の主人公であるが物語はクルツの戦歴を積み重ねて成長する様を描いているが、バウアーのキャラクターが強烈で主人公としては若干影が薄い。本作では主役の座まで食われた、黒騎士の常識人。第２次世界大戦を生き抜き無事に復員している、黒騎士でただ一人

の生存者。
（名台詞：バウアーとの掛け合いが名台詞であろうが、作者が好きなのは、　了解、地獄までもついて行きます　ですね）

オットー・シュルツ
最終階級は准尉で、当初は中隊先任下士官で曹長、中隊長車の砲手だったが軍団直属部隊としての再編以降は０２号車の車長に、戦死前の戦いでは第３小隊を指揮していたと思われる。本作では戦死する前にバウアーの２号車として登場、学生を鍛えたり悩みを聞く親父分である。バウアーとは長い付き合いで彼が少尉任官後に配属された時からの戦友だった。本編では、１９４５年２～３月頃に戦死する。本作では中隊の一員として戦闘に参加する場面が多かったが黒騎士物語外伝では中隊本部班長として後方支援任務に従事する場面が多くなっている。今作では教育から戦闘までなんでもこなすマルチタスクな副官。
（名台詞：だまれ！優れた戦車兵は優れた兵器に勝るんだ！　だまれ、お前も俺も戦争という病気だお前の病名は装填手、そしてお前が居ないと俺達は戦争が出来ないんだぞ。　どちらもおびえる新兵に吐いた台詞です）

マイヤー
最終階級は軍曹で、当初は伍長で中隊長車の操縦手だった。ハンブルク出身でソーセージ職人の息子、所帯持ちで妻と幼い一人の子供をハンブルクに残してきている。最終的な生死は不明だが仮に最後の戦闘まで生き延びていても中隊長車は撃破されて乗員は埋葬され、クルツ車はクルツ以外はソ連兵に射殺されているので戦死したと思われる。本編では一号車とともに転移、バウアー不在の一号車を動かしている、影は薄いが縁の下の力持ちである、苦労人２号。
（名台詞？：（爆撃を受けたハンブルクからの手紙で）女房が無事だ！）

ハンス
最終階級は伍長で、当初は上等兵で中隊長車の無線手だった。本編では、マイヤー軍曹と同じ理由で戦死したと思われる。
今作では、無線をいじってラジオを聴いてたり、マイヤーの愚痴を聞いている、苦労人3号。
（名台詞：（赤軍に偽装するときに）チェ！転属ですか。ソ連軍の給与は最低なんですぜ。）

オットー・クリューガー
最終階級は曹長、黒騎士の補給担当で財布担当、戦車や物資の消費が荒い黒騎士中隊に悩みながらも、好ましく思っている。本編では（本編には居ないけど）最後の補給を黒騎士に済ませた後、退避中の部隊に出来うる限りの補給を続け、逃げ遅れ赤軍の捕虜になり、シベリアに送られ凍死、遺体は現場の仲間達に埋葬された。最後まで任務に忠実な男だった。
本作では彼が一番鞠川校医にお世話になるだろう（おもに胃薬で）。

キャラ紹介　黒騎士物語（後書き）

本編の人物の紹介をウィキのコピペを改変しながら、作ってみました、本編の入手が困難なのも考慮に入れてこう言う物にさせてもらいました。

問題があれば修正しますので、よろしくお願いします。

それでは～

終わりの認識（前書き）

今回は突貫工事です、短いかもしれませんが、ご了承ください。

終わりの認識

どんなに世界が混沌としてもいつもどおりの青い空、其処を飛ぶ銀色の翼Ｆ－４ＥＪが飛行している。

その目的は偵察飛行である、街のあちこちの写真を撮っているのだ。

そしてそのガンカメラが移したのは、バイクに2人のりしている高校生の男女と?号戦車パンターG型のキューポラから顔を出している、隻眼の男である。

「見ろ、マイヤー、ハンス、プロペラの無い飛行機だ!」

バウアーは自身の戦車の操縦手と無線手に物珍しそうに言う。

余談だがこの写真を持ち帰った基地では、このパンターについて大論争が巻き起こった。

そして街に入ったとき、麗が口を開いた。

「どうして盛り下がることばかり言うのよ!」

「学校の屋上で見たヘリと同じさ!例え自衛隊が動いていても僕らを助ける余裕はまだ無い、もしかしたらこの先もずっと・・・」

「なら、歩みも思考も止めて、あのバスの大多数の人間みたいになるのか?」

バウアーが孝に問う、麗もこう返す。

「じゃあ、どうするのよこれから？」

バウアーの言葉で熱が取れたのか、麗は思ったより穏やかに孝に聞く

しかし、いらない一言を付け加えてしまった。

「孝っていつもそうよね、大事な時に盛り下がることを口にして・・・幼稚園のころからずっと」

これが孝に熱を加えた。

「それと今の騒ぎに何の関係があるってんだよ！」

「無いけど、あるのよ！」

「落ち着かんか！2人とも！」

喧嘩になりかけた2人をバウアーが一喝する。

「おい、マイヤー痴話げんかだ！」

「やめとけ、恋人同士の喧嘩に顔を突っ込むとろくなことにならんぞ」

操縦手マイヤーと無線手ハンスが車内で2人に聞こえないように茶化している。

ハンスにいたっては、無線と周波数をいじってラジオを楽しんでいる。

バウアーに毒気を抜かれた孝がバイクの燃料を見ると半分を切っていた。

「もう、幾らも走れないな、スタンドを探さないと」

「信号2つ先にあったと思うけど・・・」

風が吹き抜け、彼らが改めて回りを見ると、荒れ果てたマンション、投げ捨てられた自転車、

血だまりに落ちているかばんの周りに猫が2匹たむろしている。

「猫は襲われないんだな」

バウアーがそれを見ながらぼそっと呟く。

彼らは、荒れ果て誰も居なくなったゴーストタウンを進み続けた。

「誰も・・・いない」

「逃げたか、死んだか・・・」

「死んだら、＜奴ら＞になるじゃない！」

麗が叫ぶが孝がいまいましそうに

「追いかけていったのさ、生きてる連中を」

「なるほど、亡者は生者を追うか・・・まさに地獄そのものだな」

バウアーが孝の発言にそう返す。

「孝、バウアーさん、右！交差点の右側！」

バウアーと孝が、あっけに取られたように交差点の右側を見ると、白と黒そして赤いランプを載せたパトカーが止まっていた。

「無免許、ノーヘル、盗んだバイク、補導されるの確実だな！」

「俺達にとっての憲兵みたいなもんだな、お世話になりたくないのは同感だ」

「さんざん＜奴ら＞と戦っておいていまさらパトカーが怖いの？あっでも戦車が・・・」

麗がパンターを見てはっとなり、パトカーの前を通ると・・・

パトカーは横からトラックに突っ込まれて前部が無事だが後部は原型がなくなっていた。

「マジかよ・・・」

「見ていて気持ち良いものじゃないな・・・」

バウアーと孝が唖然としてしていると麗がバイクから降りる。

「麗！、何するつもりだ、パトからガソリンが漏れてるから危ない・・・」

「役に立つものが手に入るかも！」
孝が麗を止めるが、そう返しパトカーに向かう。
「死体あさりは好きじゃないんだが・・・」
ぼそっとバウアーが呟く、歩いてた麗が立ち止まり。
「なにボケてんのよ！孝もやりなさい！」
麗が孝に投げかけるがバウアーが眉間を抑えながらこう言う。
「お前ら、武器が欲しいなら俺達のを貸してやるから、やめておくなら今のうちだぞ？」
「私達もバウアーさん達の足手まといに成りたくないの、一緒に肩を並べて戦いたいの！」
「・・・俺も、確かにバウアーさん達に頼りきりに成るのは嫌です！」
バウアーの忠告に2人はそう叫び、宣言する。
するとバウアーも観念したようで、
「手伝いはしないぞ？早く必要なものとって来い！」
バウアーの声を受けると2人はパトカーの中を物色し始めた。
そして出てきたのは、手錠、警棒、拳銃の3つである。

「いわゆる、おまわりさんセットだな」

「誰に言ってるんです？中尉」

「うるさいぞ、マイヤー」

2人が寂しい掛け合いをしている間に2人は拳銃の使い方について話し合っていた。

「使い方分かる？」

「テレビで見たのと、バウアーさん達の使ってるのを見たとおりなら・・・、確か撃つ時以外引き金に指掛けちゃいけないんだよな」

「それだけ分かっていれば十分だ、後は当てれるように練習するだけだな」

麗の質問に孝が答え、バウアーが合格点だと言わんばかりに、付け加える。

すると、孝が拳銃を見つめる。

「どうしたの」

「なんか、ずっしり来る・・・」

「そりゃあそうだろう、この程度で重いと思ってたら俺たちのは持てんぞ？」

麗の疑問に答える孝にバウアーがやれやれと言った風に返す。

そして残弾を確認すると、孝が

「5発しか撃てないのか・・・」

とため息をつく。すると麗が「手を出して」と言い、残り五発を手に置きこう言った。

「これ、もう一人の巡査の、銃は握るところが折れてたけど玉は大丈夫みたいだから」

手を拭いている麗に孝が「凄いな・・・お前」と言いつつ若干引いていた。バウアーは「逞しいな！」と笑っていたが。

「お父さんが持ってたの見せてもらったことあるし、それに今更血がついたぐらいで驚くと思う？」

麗がそう答え、孝は拳銃をポケットにしまう、そして麗が金属バットとモップの柄をだして

「これ捨てる？」

と聞くが

「今さらだろ？それだったらバウアーさんたちがいる内に捨ててるよ、それに予備はあった方が良いし、銃は練習しないと当たらないよ」

と返答する。バウアーがすかさず

「これで、君達も銃を保有したわけだな」

と、なんとなく満足げにうなづく。しかしその瞳は子供が銃を持つ状況を呪っていた。

そして彼らの、パンターとバイクは先に進んだ。

車両の生命線であるガソリンスタンドに向かって。

終わりの認識（後書き）

どうも作者です、モチベの維持が難しいですね、乾燥こそが原動力とはよく言ったものです、もう少し進めば、書きたいとこがクルのですが・・・

感想、要望、などなどよろしくお願いします。

生と死（前書き）

モチベーションの維持って難しいですね、長期更新停止の理由も分かってきた今日この頃です、更新は続けますけどね！

皆さん、要望や援助物資有難うございます！

生と死

そして、一両のパンターと一台のバイクはガソリンスタンドに来ていた。

セルフサービスとこの騒ぎのせいか店員のひとりも居ない。

そこに高校生2人と眼帯の男一人立っていた。

「ガソリン残ってるかしら」

「どんなタンクにも乗用車千台分ぐらい入るタンクを備えているって言うから、大丈夫だろ・・・」

「我が軍にも、前線にこれがあったら、いやイワンの砲撃で吹き飛ぶから後方に・・・」

「バウアーさん、それ取れぬ狸の皮算用です・・・」

バウアーの呟きに孝が突っ込む、そのまま燃料を入れようとした孝が舌打ちした。

「どうした?」

「どうしたのよ」

2人が殆んど同じことを返したとき、孝が2人の疑問に答える。

「このスタンド、セルフ式だからそこにカードか金を入れないと」

「入れたらいいじゃない！」

麗の叫びに、孝も熱くなったのか強めに返す。

「ジュース買ったから３０円しか持ってないんだよ！」

麗がトーンを下げ返す。

「・・・最低」

この一言で孝も頭に血が上ったようで。

「悪かったな！俺は永じゃないんだよ！」

「なによいきなり！、いつわたしが永と比べたのよ！」

「最低って言ったろ！って事は最高が有るってことじゃないか！、永のことに決まってる」

「本当に・・・最低ね」

「うるさい黙れ！、俺の前で痴話げんかを始めるな！」

喧嘩を始めた2人にバウアーが怒鳴る、どちらかが余計なことを言うとしょうちせんと言った風である。

「と、言っても俺もこの時代の日本の金は持ってないな・・・ライヒスマルクか軍票じゃ駄目か？」

「使えませんよ、きっとドルとかでも」

「カードなら使えると思うけど？」

現代っ子2人がそう返すが、バウアーの頭上には「？」が浮かんでいるだろう。

「カードって何だ？世界共通の通貨なのか」

「いや、そう言うものじゃなくて・・・麗知ってるよな」

孝が困り顔で目線を逸らしていると麗に話を振る。

「えっ、ちょっと・・・どこでもお金を貸してくれる手形みたいなもので後で料金を請求されるんですよ」

「どこでもローンがこの時代には出来るのか・・・それだと財布の中身を気にせず買い物してしまうんじゃないか？」

「それが社会問題にもなってたりして・・・」

麗が何とかたとえを考えて答えるが、バウアーがそれに対する問題を質問するが困り顔で何とか答えている。

「で、宮本はそのカードか金を持っているのか？」

「・・・財布鞄にいれっぱなしだもん」

バウアーの問いに麗は目線を逸らすように答える。

「なんだよ、自分のことは棚に上げてたのかよ」

「また痴話げんかを始めるのか？」

とぼやく孝にバウアーが睨みを入れる、目線を逸らすと孝が従業員入り口に気づき。

「バウアーさん、あそこに店員の事務所があります。あそこには多少なら・・・」

「いざとなれば、腰の拳銃で脅すか？」

「それ、強盗です」

「東部戦線では渋る補給班からこうやって工面して貰ったんだが・・・」

一緒に行こうという孝に店員が居た時の対処法を言うバウアーに突っ込みを入れながら、麗に「ここで待ってろよ、何かあったら叫べ」と言い残す。

「マイヤー留守番任せたぞ！」

「了解！中尉、東部戦線を思い出しますね」

マイヤーに留守番を任せると2人は事務所に入っていった、だが麗を後ろから何者かが見つめていた。

「誰か居ませんか？」
孝が事務所でそう言うが、返事は帰ってこない。
「お留守のようだな」
バウアーが肩を竦めながら微笑む。
すると、孝はレジに近づき少しいじった後。
「駄目です・・・」
「よし！任せろ」
バウアーが銃を構えると孝が手で制して。
「一度、やってみたかったんです」
そう言うと棚の上に乗るとニッと笑い、バットを振り上げレジをたたき出した。
（そうさ、分かっていた、楽しくなりだしてきた、僕はこの世界が好きになり始めていた）
孝の心情を知ってか知らずかバウアーも心中で
（小室が狂気に飲まれ始めている・・・こりゃあ後で、仕立ててやらんと壊れちまうな）
と考えていた。

外で待っている麗にもレジの破壊される音を聞き

「・・・やりたい放題ね」

とため息を付いていたが、自分のそれまでの行いを思い出し

「あたしも孝のことは言えないか」

その時麗の背後に誰かが飛び掛ってきた。

そのころ2人は事務所の中でお札を拾い集めてた。

「これぐらい有れば、他に必要なときがあっても―」

「これが日本円か良く出来てるな・・・」

とそれぞれ感想を述べていた時。

「キャアアァ！」

麗の悲鳴が響いた！

「麗！！」

「むっ、お客さんか！」

2人が事務所から飛び出す、バウアーは札と硬貨をポケットにねじ込み、孝は握りっぱなしだ。

「ひゃーーはっはっはっ！」

2人の前に現れたのは割と大柄な男が麗にナイフを突きつけ高笑いしていた。

「兄ちゃん、おっさん、可愛い彼女連れてるじゃねーか」

「麗を放せ！！」

孝が叫ぶがバウアーが相手を睨みながら手で制す。

「この手の奴に言葉は通じんよ、放すつもりはないな？今なら見のがしてやるが」

「言ってくれるじゃねーか、コスプレおやじ、放すわけねぇだろう！化け物だらけになっちまった世界で生き残るには女がいねーとなぁ、ひゃわはははは！！」

バウアーの警告に狂言と高笑いで返す男に孝が

「壊れてるのかお前」

「壊れてるかって？当たり前だ！！俺の家族は目の前であいつらと同じになったんだよ！俺は・・・俺は・・・家族の頭ブチわってきたんだ！！親父も、オフクロもバァちゃんも・・・弟も妹もなぁ！！」

高笑いする男をバウアーは片目でそれだけか？と言った風に睨むが男は人質が居るせいか余裕で続けた。

「まともでいられるわけねーだろ！！」

「孝・・・！」

涙目で叫ぶ麗に男は舌なめずりして麗の胸をもみ始めた「ひぐぅ！？」と声を上げる麗に満足するように男は

「あー声も胸も最高だぁぁぁそれになかなかの巨乳ちゃんだぜぇっ、おまえこの子とヤってんだろ？毎日ヤりまくってんだろ？」

孝は憎悪を込めた目でにらんでいるが、バウアーは可哀想な者を見ている目である。

「バウアーさんっ・・・孝っ」

「ヤってねーのかよ？バカじゃねーの？ひゃはははは！！」

孝がにじり寄るが、男がそれに気づき

「おーっと、バットと銃を捨てな、出なけりゃこの子を殺す！！それから戦車も頂くぜ！」

「ガソリンが殆んど無いぞ？それにお前じゃあ無理だ」

男が叫ぶその後ろでマイヤーとハンスが男の後ろで構えていた、２人の手にはそれぞれ布と紐をもって、それにバウアーはアイコンタクトを送ると言葉を続ける。

「その程度で壊れるお前には俺の戦車は相応しくない、今なら見逃してやる、最終警告だ、俺も弟２人戦死してるし、親父に別れの挨拶もしていない、それに戦車はチームで動かすものだ、なぁ！」

「何おぅ！？ぶっ殺してやる！」

「ほう？壊れた世界には女がいるんじゃなかったのか？もともとない脳みそまで壊れたか？」

「ぶっ殺ｓ・・・」

バウアーの挑発でトサカに来た男が麗を殺そうとするが、背後からマイヤーに布をかまされ声を出せないようにされ、ハンスに引き倒された。

その後もがく男はバウアーとマイヤー、ハンスの屈強な軍人３人に袋叩きにされた。

「言ったろう？戦車はチームで動かすものだと。マイヤー、戦車に入るだけガソリンを入れろ。

ハンスは縛り終わったら、マイヤーと一緒にジェリカンにガソリンを入れろシュルツ達への土産にする」

「「了解」」

２人はてきぱきと作業をこなす、途中マイヤーがガソリンの入れ方を孝に聞いていたがそれを聞いたあと３人で作業をしていた。

「さて、お前はどうされたい？こうなった人間は奴らよりたちが悪い。ここで処理しておこうか、どうだ？小室、麗」

「どうする・・・？」

「そうねぇ・・・」

縄でぐるぐる巻きにされなおかつ布の猿轡まで噛まされ、３人にサンドバッグにされた男を見て哀れみを感じたのである。

男は小さくなってモゴモゴ言っているが、バウアーの先ほどの言葉で青ざめているのでおそらく命乞いだろう。

「言い訳ぐらいは聞いてやる」

バウアーが布を外すと

「許してください、許してください、もうしません・・・・」

と壊れたレコーダーのように続けるので、お手上げだと言う風になり、拳銃を額にあて

「奴らに食われて死んで人に迷惑かけるよりましだろう、これなら痛みは一瞬だ、安心しろ」

と言い男の額を撃ち抜いた。

「きゃっ！」

「バウアーさん・・・」

「これでお前たちが罪悪感を感じることは無くなった、俺の責任だ」

悲鳴を上げたり、小さく声を出す2人にバウアーはそう言った、その時

「中尉、作業終わりました」

「2人のバイクにも燃料を入れておいた、行こう！」

2人はバイクに乗り3人はパンターに乗り出発した。そしてバウアーは2人に声をかけた。

「お前たちのせいじゃない、あんな壊れた脳筋どの道あの死にぞこないどもの仲間入りしていただろう、俺が居なかったらお前らは見逃したか？」

2人は何も答えなかった、麗が

「どうしたの？」

と聞いていたがただ「なんでもないよ」と孝は答えていた。

（あの時、助命を助けていたら、もしバウアーさんが居なかったら・・・多分僕らが殺されていただろう。

なんでもない筈が無い。僕らは遠まわしに一人の人間を死に追いやったのだから・・・）

生と死（後書き）

と、バウアーらしさが出せたか心配の１０話です。

感想、要望、意見、などが作者のモチベーションに繋がります。

皆さん、応援これからもよろしくお願いします。

空港にて（前書き）

遅くなってすみません、今回はオメガとあの2人登場です。

空港にて

終わりは彼らの周囲だけで起こっていた訳じゃなかった。

飛行場の飛行待機中のジャンボジェット機内

副操縦士と機長が確認を行っていた。

「乗客のチェック終了しました、該当しそうなものは居ません、負傷しているものも高熱を発している者も・・・もう死んでいるものも」

と報告する副操縦士に機長は前を見ながら

「君家族は東京だったな」

と聞くが副操縦士はあきらめら様子で

「電話には誰も出ません」

と答えた。そして管制塔などにインカムで連絡する。

（床主管制塔　こちら０８９便離陸準備完了した）

（０８９便こちら床主管制塔、滑走路端で待機せよ、我々には問題が・・・生じている）

装甲車の上で狙撃の体勢を取っている、男女のコンビが居た。

「あら～いい男。見覚えがあるわ」

女性の方がスコープ越しに＜奴ら＞となったイケメン俳優を見ながら呟くと観測主である男性が答える。

「床主へ公園に来ていた俳優だよ・・・左右の風はほぼ無風、修正の要なし！」

「射撃許可確認した！」

ＰＳＧ－１が火を噴く、とたん＜奴ら＞の眉間に吸い込まれる。直ぐに２射目を撃つともう一体も頭がはじけ沈黙した。

「お見事、化け物どもは全滅だ！」

男性の全滅報告と同時に女性の方が立ち上がり、防弾チョッキの下の胸をもみはじめる

「ふぅ――っ」

「・・・なにやってんだ」

ジト目になってる男性が聞くと

「朝から寝転びっぱなしなのよ、痺れちゃった」

伸びをしている女性に、男性の方が

「俺が揉んでやってもいいよ」

と皮肉混じりにつぶやく、それに女性が答える

「あたしより射撃がうまいならいいけど？」

「全国の警官でベスト5に入るおまえにか？無茶言うなよ！」

「なら、あきらめて」

と、不毛なやり取りを続けていたが、男性の方が話題を切り替える

「にしても、船でしか来られない洋上空港にまでるとはな・・・立ち入り規制はしてたんだろ？」

「ええ、要人とか空港の維持不可欠な技術者、そうゆう連中の家族の誰かが”なった”のよ・・・。

今はまだ良いけどいつまで持つか」

「化け物による被害の少ない北海道や九州の空港は受け入れ拒否を始めている。

俺たちが空港警備のために派遣されてなければどうなってたことか、しかも玉も無限にあるわけじゃないから・・・」

と呟く男性に女性の方が冷やかすように

「逃げるつもり？」

「そのつもりはない、まだね」

その答えを聞いた女性は自分の目的も言う

「わたしは街にいくわ。いずれは・・・」

「男でもいるのか？」

男性の疑問に女性が答える

「・・・親友がいるのよ」

場所は代わり、床主空港のロビーでは

「佐藤三佐空港で足止めですね・・・」

と余裕綽々の貧相な顔をしたメガネ男が隣にいた貫禄のある大柄な男に不満げにつぶやく。

「馬鹿野朗っ！そんなの見りゃあわかるだろ。だから高校もろくに出れねえんだよ」

そう言いながら佐藤と呼ばれた男は眉間にしわを寄せる。

「それよりも代わりの足を確保できたんだろうな、中村くん？」

「えっ！？やっといたほうがよかったですか？何も言われなかったのｄ・・・」

「このボケっ！！」

空港中に響くような大声で佐藤が被り気味に怒鳴りつけ、他の足止めを食らった客も思わず顔を上げる。

「そんな簡単な機転もきかねえのか。これだから学も教養もねえヤツは・・・」

「そこまで言わなくてもいいのによぉ」

そう小さくぼやきながら中村は通じない携帯を捨てて公衆電話に走る。なけなしの１０円を使った公衆電話も、もちろん通じない。

「まあ通じるわけ無いか。ん？なんだあいつ？ふらついてるじゃねえか」

スーツを着た空港の職員らしき男が中村にゆっくりと近寄ってくる。その顔は死者のように青ざめている。

その異様な気配に気づいた佐藤が身構え、それに気づいた中村が尋ねる。

「どうしたんですか佐藤さ・・・」

「そいつから離れろ中村！」

佐藤の怒号と同時に、男が中村に飛び掛る。情けない声を出して、中村はかろうじてそれをかわして尻餅をつく。

「ひいぃぃっ！何なんだよこいつ！」

ゆっくりと中村の方を向いた男の口から誰かの指が転がり落ちた。

その胴体にはスーツの上から噛み千切られた痕がいくつもあった。
佐藤は懐からＳＩＧ　Ｐ２２６を振りぬくと、その弾丸を脳天にお見舞いした。ロビーに悲鳴が響き渡る。
どうやら＜奴ら＞になったのは１人２人どころではないようだ。佐藤は腰の抜けた中村を引っ張り上げ、
「おい中村、こんなとこにはいられん。すぐに移動するぞ！わかったか！」
「なっなな何なんですかあいつらは！？いいきなり襲ってきましたよ！」
「ゾンビだかなんだか知らんがかまうだけ無駄だ。無線の使えるところに行くぞ」
「まっまさか管制塔にでも行くんですか！？」
「ほう、中村君にしては察しがいいじゃないか」
そう言うと腰が抜け嫌がる中村を引っ張り、大混乱になっているロビーを早足で去っていった。
ほぼ同時刻、国会議事堂は動く屍が跋扈し、ところどころに血溜りが出来、さながら地獄絵図と化していた。

その地獄を制圧しながら進む、自衛官と思しき分隊がいた。彼らはまるで赤子の手をひねるかのように＜奴ら＞を掃討して行く。

「こちらオメガ7、ＨＱ聞こえるか？今から衆議院棟に突入する。問題ないな？」

「了解した。わかってると思うがけが人は射殺しろ。救出中にゾンビ化したらたまらんからな」

「余計なお世話だ。じゃあ行くぞ、１・２・３・・・ＧＯ！」

ドアを少し空けると、Ｍ６７手榴弾を３つほど放り込みすぐにドアを閉めた。爆風でドアが吹き飛ぶと同時に突入し、

残った＜奴ら＞をＭＰ５ＳＤ６の鉛弾が片っ端から黙らせる。

そして、鉛の雨が降り終わって動いていたのは、８人の男達だけだった。

「こちらオメガ7、これより残敵掃討に入る！」

二人一組で４つのペアをつくり、端々に残った＜奴ら＞を確実に沈めていく。あらかた掃討が終わったころ隊長らしき男が尋ねる。

「大体終わったか平岡？」

「おう、小松。動いてるゾンビは居ないぞ。田中はどうした、やられたか」

「ひどいですよ平岡さん。俺だってレギュラーですよ」

小松と呼ばれた男が＜奴ら＞の息の根を確認をして、とどめをお見舞いする。そしてＨＱから参議院棟と中央部も制圧し国会議事堂を奪還したことを知らされる。

「これでけりは付いたな。ゾンビどもから官庁街を取り戻したわけだ。後は近くの師団に引き渡せば任務完了だ」

「これで休暇ですかね？普通の部隊が動き出すまでこき使われ続けたんですから、休みと特別手当ぐらいもらえるでしょう」

「期待するなよ田中。！、緊急無線だ・・・こちらオメガ７何事だ？」

小松が無線に出る。

「あ～あ～・・・こちらバッドカルマ、空港でゾンビの襲撃を受けた、助けに来い」

「人使いが荒いな・・・何処の空港だ？」

「床主空港だ、知らんか？最近拡大中のベッドタウンの空港だ」

「そこに行けば良いんだな？」

小松が場所を確認すると、佐藤から返答が返る。

「くそっ、存在しない影の部隊だからっていいように使いやがって、特別手当は出るんだろうな？」

「幕僚長直轄の部隊の宿命だあきらめろ。かなりの数がいるからＡＣ－１３０を手配しておけ、それじゃあ頼んだぞ」

佐藤から予想通りの無慈悲な一言を聞き、小松たちは国会議事堂をあとにするのだった。

空港にて（後書き）

今回はラストは駆け抜けた感じになりました、自分の文才が恨めしい。

感想、要望、意見楽しみにしています。

渋滞の中で（前書き）

進行が亀進行です、しかも短い・・・

渋滞の中で

そして視点は戻って、バスの中鞠川がハンドルに寄りかかりながら渋滞を過ごしていた。

「それぞれが勝手に行動するよりどこか・・・、安全な拠点を得た後に行動すべきです。
　たとえば家族の安否も規律ある集団としての準備ができてから――」

と紫藤の演説が続いているが、クルツはバスの扉を開け隣に居るパンターのキューポラから顔を出しているシュルツと状況確認している。

毒島は目を瞑り、瞑想といった感じだ。

高城も目をつぶりこれからの行動を考えていたのだろうが、唐突に目を開け小声で。

「平野っ」

寝ている平野を肘で突き起こす。

「んあ、あ、高城さん、おあようございます」

彼の口からだらしなく涎が垂れている。

「よく寝られるわね、ヨダレ、ヨダレ」

「だって・・・」

彼はそのまま外の様子を確認させる。

外ではすさまじい量の車が渋滞を起こしてどこまでも連なっている。

横から聞こえるクルツとシュルツの会話からは

「日曜日のカイザーヴィルヘルム通りより混雑してるぞ」

「でも、准尉、我々のところだけ結構スペース開いてますね」

それはそうだろう、戦車と軍用車に近づきたいものなんて居ないだろう。とクルツの後ろの座席に座っている卓造はそう思っていた。

そんな人の群れを平野はバスの窓から眺めながら

「街の外に逃げた方が良いのに」

と呟き高城が窓の外を指差しながら

「車だけが脱出の手段じゃないわ」

と言うそれをちょうど飛行機が飛んでいったためか平野がそれを見て

「あ、洋上空港か」

と即座に疑問を口に出す、高城がそれに付け加えるように

「港もあるし都市部が危険なのは目に見えているから、どこかの島に逃げようとしているのが沢山いるはず、武器の人口比が高い孤立

した地域とかも」

「・・・沖縄とか？」

と即座に思いついた地名を平野が口に出す。

「適切な対処が行われていたら北海道や九州でも・・・飛行機が向かっているのは大抵そのあたりよ」

「僕らもそういうとこいきますか」

と、高城の結論に納得した様子で平野が結論をだす、そこに高城が異論を言う

「遅すぎるわ、自衛隊とかアメリカ軍が多い地域はたとえ＜奴ら＞を抑制出来ていても受け入れに厳しい方針を採り始めているはずよ、いいえいずれ世界のあらゆる場所がそうなる・・・他者との接触は＜奴ら＞の侵入を意味しかねないとしたらアンタどうする？」

質問する高城に平野はこう返した

「引きこもります」

「世界中の人間がそう考えたらどうなるかしら？生き延びるのに必要な最小限のコミュニティを維持することだけを考えるようになったら・・・」

高城の自論に平野は少し顔に影を落としながら

「高城さんは本当にあたまがいいんですね」

思ったままの言葉を口にする、だが高城は何を言っているといった様子で紫藤を指しながら

「あいつもうそういうノリになってる、自分で気づいてるどうかは分からないけど、いい？たった半日でそうなのよ？」

と、困った様子の高城に目つきを変えた平野が釘撃ち機を構えるが、クルツが顔を出し

「大丈夫、そう言う荒事は私たち大人に任せておいてください」

と余裕に満ちた顔でウィンクして見せた、そして高城が親指を顎に抑えながら自分達のこれからを考える

「それよりあたし達がどう生き残るか考えた方が良いわ、信用できる相手と・・・バウアー中尉と小室が居たら相談できるのに」

一転黄昏出した平野が一言

「バウアーさんはともかく、高城さん小室のこと好きですもんね」

その一言に高城は顔を赤くして

「バカ言わないでよっ」

近くに来ていたクルツ、毒島、鞠川の3人は目を細めつつ、ふ～んと言った様子だ3人の背後には花の帯が見えそうだ。クルツが

「青春してますね」

と呟いた後照れ隠しのようにゴホンと咳払いをしながら

「・・・ちょうどいいわ」

と立ち上がった。

―――同じころ

僕と麗とバウアー中尉達は新たな終わりを目にしていた

誰かが投げた爆発物や、火炎瓶などが爆発し煙が立ち込める中動く奴は全て敵だと言わんばかりに猟銃を撃ったり日本刀を振り回したりゴルフクラブで殴り飛ばすものなどが大暴れしていた。

「ムチャクチャね、戦争みたい・・・」

麗が惨状を見て呟くがバウアーには日常光景みたいなものだったらしく。

「何、イワンや速成訓練の新兵が突入するとこんなものだ、まぁ憲兵や上官みたいに止める奴が居ない分余計酷いな」

「ですね・・・、待っていても仕方ない行こう！」

バウアーの発言に孝が同調し進むことを決める。そして人目の付く場所に出たとたん、刺青を入れた男が気づき。

「！、おいっ」

そのとたん、スーツを着た猟銃を持った男が猟銃を構え、麗がお退きの声を上げる

「えっ・・・」

「しっかり捕まれ!!」

そのまま孝は前進していたパンターの陰に隠れる、もう一発撃たれパンターの塗装を一部剥がす。

「陰に隠れてろ!、砲塔旋回、マイヤー!同軸機銃で追い払え!」

パンターはバイクを庇う様に進み砲塔を向かってきたりする暴徒の方に向け7．92　mm　MG34機関銃の同軸機銃を撃ち出し、方端から血煙に変えた。

「うっ・・・」

人間であろうが敵であるならば容赦しないバウアー達に改めて別の時代の人間であることを認識しつつそして周りの異常事態に麗が叫ぶ

「どうして!?私たちは<奴ら>じゃないのに!!」

「頭に血が上ってみんなおかしくなってる、僕らと同じさ」

孝の返答に麗は言葉を呑みこむように

「あたしたちと同じ・・・」

「違うな、連中はただの暴徒だ、小室君は統率の取れた部隊とあの

ような暴徒を同じにするのか？」

バウアーが問うように孝に尋ねる、声の調子こそ何時もと同じだが答えを間違えれば降りた時、鉄拳制裁は覚悟した方が良いだろう。

「違います、もっと軍隊の部隊は統率が行き届いていて・・・」

「そうだ、俺の目の黒いうちはお前らを統率の取れていないただの暴徒にするつもりは無い、もっと冷静になれ」

孝の答えに納得するようにバウアーは言葉をつむいだそしてもう一言

「もし、あんな暴徒や死にぞこないになったら、俺がヴァルハラに送ってやる！」

「あははは・・・」

付け加えた言葉に苦笑いする、孝であった。だが上の道路標識に気づくと孝は直ぐに右折した。

麗が驚きながら孝に聞く。

「！？、大橋はまっすぐじゃない！」

「大橋の方見てみろよ」

孝は麗に大橋の方を見るように促す、追いついたバウアーと一緒に橋の方を見ると麗は絶句していた。

人と車の長い列の中に一部＜奴ら＞が紛れ込み阿鼻叫喚の地獄絵図と成っていた。そしてその中に放送が繰り返される。

『繰り返します警官の支持に従いあせらず進んでください！現在市内全域は交通規制課にあり無断で渡河しようとした場合は法的な処罰を受けることになります！また床主大橋、御別橋以外の橋は通行止めとなっており渡河は許されません』

そんな中強行突破しようとした、バウアー曰く頭に軽石が詰まっている連中が川に落とされるのを見ながら3人は。

「あれじゃ、いつ渡れるのか・・・」

麗が呟く、そして孝が答える

「そう分からない、だからこのまま城の脇を抜けて御別橋に向かおう、静香先生たちの進んだ道あっちに繋がってるし渋滞してるのは同じだ、橋を渡る前に合流できるはずだ！！」

「紫藤が一緒だったら・・・」

麗が心配そうに聞く孝はため息を付きながら

「これがあるし、バウアー中尉も入る向こうにはクルツさん達もいるんだぜ？いざとなったら追い払ってやる」

それを聞きながらバウアーは

「余り俺たちを頼りにされすぎても困るが・・・合流の手はずは任せたこの辺の地理は俺たちには分からん、行くぞ！」

そして彼らは合流するために動き出した

渋滞の中で（後書き）

ええ、短いですねすみません。
感想、要望、質問、アドバイスが作者の原動力です！

決裂！（前書き）

それでは、始まります。

決裂！

「こうゆう時だからこそ我々は藤見学園の者としての誇りを忘れてはなりません、その意味ではバスを飛び出していった宮本さんや小室君、あの暴力男は皆さんの仲間には相応しくなかったのです！！」渋滞するバスの中紫藤の演説が続いていた。

「我々が居る中で中尉馬鹿にするとは、黒騎士に喧嘩売ってるんですかね？」

それをクルツが冷めた目で見つめている。

「マジヤバイわよ」

「確かになあれではまるで新興宗教の勧誘だ」

高城と毒島が相談している後ろで殆んどの生徒に向けて演説を続けている。

「生き残るため団結しましょう！皆で力を合わせこの難局を切り抜けるのです！！」

「君達は向こうに行かなくて良いのかい？」

クルツが卓三とその彼女に話しかける。

「いえ、俺たちはクルツさん、あっ俺は市原卓三です、こっちは羽（は）島直美（しま・なおみ）です、とあの戦車に乗ってるおじさんとの会話聞いてたら色々冷めちゃって貴方達についていこうかなと思ってたりして」

「ああ、君達の前でシュルツ准尉あのおじさんね、とはなしてたりしてたからね、でも我々について来るのはきっと辛いよ？」

とクルツが自分達の話を聞いてた上で付いて来ることへのリスクを言った。

「それに、このままじゃあ俺あそこで死んでたと思うし、直美も守れないと感じて、それにクルツさんの中に男を見ました。弟子にしてください」

卓三の宣言を聞いてクルツは手で目を覆い上を見て

「私自体まだ中隊の見習いですよ？中尉や准尉には及びませんし、それに中隊に入るというのならとことんしごきますよ？連中に食われた方がましと思えるくらいにそれでも良いんですか？」

クルツが卓三の目を見ながら問う。

直美が心配そうに卓三を見つめるが卓三はクルツの目を見て。

「はい、中隊の見習いで良いんで入れてください！」

「しかたないな・・・人手は多い方が良いか（後で中尉と准尉に怒られるな）その代わり途中で逃げることは許さんからな！」

クルツも覚悟を決めこの世界で出来た自分の部下を見つめた、

後でバウアーに起こられる覚悟も決めて。

～～～パンター車内～～～

「おい、石井！車内であのいけすかん男がなんか言っとるぞ、聞か

なくて良いのか？」

「いえ、ここから見てると紫藤先生達がただの痛い集団に見えるし、狭い車内とシュルツさんの怒声にも愛着が・・・」

パンターに乗っている石井とシュルツはそんな会話をしていた。

「狭い車内と俺の組み合わせで悪かったな、広いバスにでも乗って向こうに乗れば良いじゃないか秀才君」

「俺も好きじゃないんですよ、紫藤先生家柄も良いせいか殆んどの生徒馬鹿にしてて良い思い出なんか無いですよ、シュルツさん先生になれば良いのに」

コマンダーキューポラの隣に押し込んだ石井がそう感想を述べるとシュルツは頭をかきながら

「お前らみたいなガキの面倒が見えるか！？」

と乱暴に頭を撫でた。

トラックの車内では森田が延々と紫藤の悪口を言いやかましく感じた、クリューガの拳骨で幕を閉じたと記しておこう。

そして車内に描写は戻る。

「まるでじゃなくてまんまそのとおりよ、新興宗教・・・紫藤教の始まりを目にしてるのあたしたちは、話聞いてる連中を見てみなさい」

高城が説明した通り、まるで生徒達は洗脳されたように紫藤の話に

食いついている。

「道がこの有様ではバスを捨てて逃げるしかないな、何とか御別橋を渡って東所に向かわないと・・・小室君との約束がある」

と毒島が状況を確認していると、高城が先ほどのリベンジといわんばかりに問いだす。

「ずいぶんと小室のこと気にするじゃない？自分の家族は心配じゃないの？」

「心配だが、家族は父一人だし国外の道場にいる、つまり今のわたしにとって小室君との約束以外に守るべきは自分の命だけなのだ、そして父からは・・・一度した約束は命にかけても守れと教えられた」

と笑顔で返す毒島に高城は目線を逸らし「へーへー」と言っているすると鞠川が言葉を選ぶように

「あーえーと、そのね高城さんお家はどこなの？」

「小室とかと同じ御別橋の向こう」

と両手を広げながら高城が答えると平野もその話題に食いついたようで

「あー僕も両親は近所に居ないんで高城さんとかと一緒ならどこでも」

そう言う平野に毒島が笑顔で

「ご家族はどちらにおられるのだ平野君？」

笑顔に戸惑いながら答える

「父さんは宝石商なんでオランダへ買い付けに、母さんはファッションデザイナーなんでずっとパリにいて」

その説明に一番面食らったのは高城のようで

「いつの時代のキャラ設定よそれ！」

高性能な平野の両親に驚いていた。そして鞠川がくすくすと笑いながら

「マンガだとパパは外国航路の客船で船長さんとかでしょ」

そう聞くと、照れるように平野は

「・・・お祖父ちゃんがそうでした、お祖母ちゃんはバイオリニストだったし」

「か、完璧・・・」

その背後でその平野の一族について頭を抱えていた。

「で、どうするの？私も一緒に行きたいから」

笑顔で高城に鞠川が尋ねる。

「いいの？」

「私はもう両親居ないし、親戚は遠くだし、こんなこと言っちゃいけないんだけど・・・紫藤先生あんまり好きじゃないの」

鞠川の最後の発言で3人とも顔に笑みが浮かんだ。

「そっちも話が決まったようだね」

クルツが後ろに卓三と直美を引き連れ先ほどの話を聞きながら話すタイミングを待っていたようである。

「俺と直美は寮生だし、実家は遠いだから俺たちも問題は無い一緒に貸せて貰うよ」

「という事だ、我々も引き続き君達とご一緒させてもらうよ」

卓三の説明の後クルツも確認をしウィンクした。

だが、前の方に人数が集まり相談しているのを紫藤が気づき

「？、どうしたのですか、皆さんここは一致協力して・・・」

紫藤が尋ねると高城が代表して

「ご遠慮するわ紫藤先生あたしたちはあたしたちの目的があるの！！修学旅行じゃあるまいしあんたに付き合う義理なんてないわ！！」

「あなた方は人生の修学旅行に行くと良いと高城さんは言いたいんですよ」

自分達には聞き覚えの無い修学旅行だが大体の意味を察してクルツは自分なりに言葉をまとめて言い放った。

「ほう・・・」

「この、優男が良い気になってんじゃねぇぞ！！」

先ほどバウアーに殴られた青年がクルツの顔と風貌で判断して殴りかかってきたのを、クルツは拳を受け止めその勢いを利用してルガーの銃底で前歯を殴打した。

その結果青年は鼻だけでなく前歯まで2本へし折れまたもバスの床を血で汚しながらのたうつ羽目になった。

一気に臨戦態勢になったバスの車内で紫藤が

「あなたたちがそう決めたのならどうぞご自由に高城さん、何しろ日本は自由の国ですからね！！」

一息置き、舌なめずりし

「あなたは困りますね鞠川先生！現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます、どうです残ってもらえませんか？こちらにもあなたを頼りにする生徒達が居るんです。

さぁ鞠川先生居場所さえはっきりさせておけば高城さんたちも困った時はあなたを頼りに・・・」

そう言って近づいてくる紫藤の頬を釘がかすり、肌からうっすらと血が流れる。そしてその勢いのまま後部座席に突き刺さり、近くに

居た根暗そうな青年が「ひっ」と悲鳴を上げる。
そして、釘を打たれた紫藤は引き下がり。狼狽した様子で
「ひ、平野君・・・？」
「外したわけじゃないたまたま外れたんだ」
そして震える声で平野は宣言する。
「き、君はそんな乱暴な生徒では・・・」
言い訳するように喋りだす紫藤に激昂しながら叫ぶ。
「俺が学校で何人やっつけたと思ってるんです？だいたいおまえは俺のこと馬鹿にしてやがったじゃねーか！！我慢してきた俺は図と我慢してきた！普通に生きて居たかったからずっと我慢してしてきたんだ！！でも、もうそんな必要はない！！普通なんて何の意味も無い！！」
そして息を整えるようにして決め手となる言葉を吐いた
「だからぼくは・・・殺せる生きている奴だって殺せる」
「ひ平野君そ、そんなことは・・・それにこれは多数決で・・・」
狼狽しながら宥めようとする紫藤だが背後に居た生徒達が
「うるせーぞ糞デブ殺すぞ！」
「先生が冷静に対応してたら付け上がって！」

と一気に彼のシンパとなった生徒から一気にブーイングと罵倒の嵐が吹き荒れた。
それを見て見かねたクルツがまたホルスターから拳銃を抜いて紫藤の耳に向けて発砲した。紫藤の耳に穴が開き血が噴出しそのまま彼はのたうつそしてその弾丸は後ろの窓ガラスに大穴を空けたその迫力で発砲で罵倒などを繰り返していた紫藤のシンパも押し黙った。

「うるさい、今度は誰の頭に穴を増やして欲しいんですか？」

その顔からは想像できないぐらいドスの効いた声で宣言する。
そしてその隙を突いた平野が毒島に叫ぶ。

「毒島先輩先に下りてください、ぼくが後衛をつとめます」

「平野君だけじゃあ心配だ、私も協力するよ」

と平野とクルツが後衛を申し出る。

「男子だな平野君そして武人ですねクルツさん」

ふっと笑みを浮かべて返した。
そして毒島の後に女性陣が降り卓三が降りると平野とクルツがバスの中を睨みながら飛び降り直ぐにドアを閉めた。
そして、パンターからシュルツが顔を出しクルツに語りかけた。

「声は聞こえづらかったが、一部始終は見ていたぞアノいけ好かない野郎との交渉は決裂したようだな！」

「ええ、准尉党の標語しか頭に入ってない連中よりたちの悪い目し

てましたよ」

「まぁどうなろうが俺たちはお前達に付いて行くぞ、お前達と一緒に居らんと中尉と合流できない」

同行について確認をするシュルツに皆満足そうに頷いた。

「どう進む？私はこのあたりは知らん！」

と周辺地理が分からないことを宣言すると高城が

「とりあえず御別橋を確かめてからがいいわ」

「たぶん封鎖されてますよ、これ普通の渋滞じゃないです」

高城の意見に平野が予想を言うそして彼らと黒騎士のメンバーは相談をしながらバスから離れていった。

そしてバスでうつぶせになっている紫藤はクルツに撃たれた左耳を押さえながら、右手で握りこぶしを作り。

生徒には見せないように自分の計画をぶち壊しにしたバウアー達への憎悪を滲らせながら。小さく

「このまま、終わらせんぞ、あの眼帯男とあのドイツ人ども・・・」

と呟いた

決裂！（後書き）

何だか燃え尽きた気分です。
でも家に着くところの描写を書くのが楽しみです。
酒と黒騎士、日本式風呂とドイツ軍人
ゆっくりですが続けて生きたいと思います。感想でスピードが上がったりモチベが上がります。ここまで続けてこれたのも皆様のおかげです。

それではご意見、感想、アドバイスなどなどをお待ちしています～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5030w/

ゲルマンの騎士達と終わる世界

2011年11月22日05時14分発行